

2024年度

佐藤・新渡戸記念寮  
創立 97 周年

# 崇徳 篤志 寮

# 巖鷺寮誌

2024 年度

一般財団法人巖鷺寮

巖鷺寮一心会

*Be social, be gentleman.*

(解説) 嶽鷲寮の創立以来のモットー。後半部分は札幌農学校のウイリアム・スミス・クラークが1期生に与えた言葉を佐藤昌介が伝えたもので、学寮(恵迪寮)のモットーと共通している。この後半部分は“be gentlemen”でなければならないという指摘もある。

## 巻頭言

# 寮長として

寮長 細田 悠平



2024年度の寮長を拝命しております細田悠平です。

本年度は新たな新入寮生3名を迎えてのスタートとなりました。私自身、2年生でこの歴史ある巖鷲寮の寮長という職務を経験させていただいていることを大変光栄に感じております。寮長としてまだまだ未熟な面もある中で、諸先輩方のお力添えも頂きながら日々の職務にあたっております。自分のそうした働きで他の寮生全員が快適に寮生活を送れる一助となれるよう、今後も寮長として献身的に働いていく所存です。

さて、本年度寮の中で見られた大きな出来事としましては、食堂にエアコンと巨大冷蔵庫が設置されたことが挙げられます。

エアコンに関しましては、本州出身の私にとって、北海道は夏でも比較的涼しいためエアコンが設置されていない建物が多いという実を昨年知った時は衝撃的でした。しかし、近年北海道の夏の気温は本州並みに上昇することが多く、夏場は自室をはじめ寮の中がとても暑くなっています。そうした時に、食堂にエアコンを設置していただいたことで、夏場寮生は食堂において快適な時間を過ごすことができました。使用期間は6-9月の3か月間と限られていますが、夏場の気温が高いときに快適な寮生活を送れるということで非常に嬉しく思っております。

そして、巨大冷蔵庫の設置に関しましても、おそらく夏の気温上昇が関係していると思われます。私が1年生の頃は、食堂の棚のトレーに並べら

れた食事を取り出すという形式が取られていたのですが、今では寮母さんが作っていただいた食事を大きな冷蔵庫の中から各自取り出して食べるという形式に変化しました。この形式になってから、発生した事態があります。それは、食事がちゃんと人数分用意されているはずなのに、次の日の朝残っているという事態があるということです。これは、寮生の中にその日用意された全メニューを取っていない人がいることから、生じるものであると考えられます。次の日残ってしまった食事は、下げられてしまうため改善が急がれる事項でもあります。この事態を解決するために、以前は冷蔵庫の中の食事は次の日の朝 9:00 の時点で残っていた場合、自由に食べてもよいという寮生の決まりがあったのですが、その時間を早めて 6:00 としました。これにより、1 限がある人でも昨日の残っている食事を食べることができますようになりました。寮母さんに日頃の感謝の気持ちをお伝えするためにも、美味しい食事を残すことなくいただくことが大切だと考えております。

さて、今年度をもって多くの先輩方がこの寮を出られると伺っております。皆さん本当に尊敬する人ばかりで、退寮されることに寂しさを感じておりますが、来年度入って来る新入寮生と共にまた新たな寮のカタチを創っていくべく努力して参ります。

最後になりましたが、日々寮の運営にご尽力下さっている理事の皆様、我々のすぐ近くで日々の食事などサポートして下さっている寮母さん、その他寮に関わって下さるすべての皆様に感謝の意を表しまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

# 「飢え」を考える

一般財団法人巖鷲寮

理事長 昆 泰寛



寮誌原稿を作成している現時点（2024年12月）において、1927年に設立された本寮は創立97年目を迎えました。現在の第4代寮は1999年に建設され、すでに25年が経過しています。その間、外装については生活を継続する上で重要であるため、財団の貯蓄を切り崩しつつ外壁ならびに屋根の補修を終えました。また、内装とくに学生の部屋ならびに厨房は長年の使用で傷みが目立ち始めました。2027年に創立100周年を迎ますが、その先さらに150年、200年を過ごすために建物内部の刷新を継続しています。これらを含め、数々の困難に耐え脈々と生き続けてきた本寮を記念するとともにこれから発展を祈念して、有志が集い創立100周年記念事業を計画・実施しています。

さて、本寮の目的は「秩序ある共同生活を通じて、健康の増進と、品性の陶冶を図ること」にありますが、この約100年を振り返ってその達成度合いはいかなるものでしょう。健康の増進と品性の陶冶を求めるながら、手にすることが難しく、寮生が渴望してきたもの（飢えていたもの）があります。では、それらはこの100年でどのように変化してきたかを考えてみましょう。ちょうど、現在の寮生は「アラ100年」、私を含めた役員の多くは昭和50～60年（1970年後半から1990年代）の「アラ50

年」（創立 50 周年を経験）の寮生なので、この 2 点で比較してみようと思います。

飢えるもの、その 1 「食事」：新入寮生は親元を離れて遠い北海道にわたり心細い気持ちが募るもの、食欲のみはどこに行っても太くなるばかりです。アラ 50 は夕食の時間前に食堂にたむろし、少しでも多くの盛りを求めました。エッセンアタックなるルールで夜中 12 時で失う夕食の権利を我先に争っていたことを思い出します。一方、アラ 100 はグルメで食に貪欲でない印象が伺えます。裕福な時代というより、寮生が 3 種の神器の一つであるマイ冷蔵庫を自室に持っている点、ならびに厨房を自由に使用できる点など、アラ 50 にはなかった「秩序ある共同生活」の新たな知恵が生まれたからなのかもしれません。

飢えるもの、その 2 「異性」：アラ 50 では完全な男子寮で、異性との接触がほとんどありませんでした。かつて入寮生の大部分は指定地域（旧南部藩ゆかりの）出身者であったためか、話し下手でした。これらを払拭するためダンスパーティーを月 1 回で開催していました。看護学校や短大の女子寮にお誘いに行くのが 1 年生の仕事で、相手の代表者と赤面しながら日程調整などをしていたことを思い出します。アラ 100 の現在では男女入寮可のため格段に異性に飢えることはないでしょう。羨ましい一方で、パンツ一丁で食堂で屯したり、廊下を移動したりすることができます。“Be gentleman” がこんなところで育成されています。

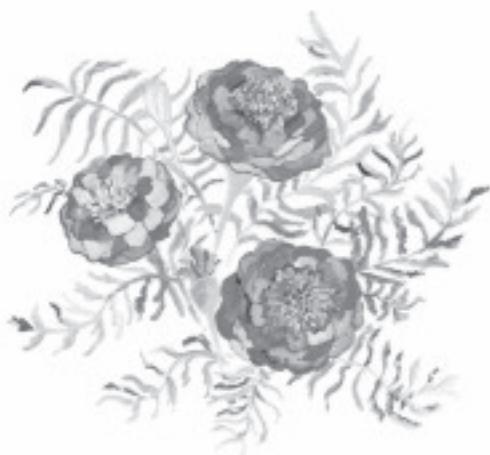
飢えるもの、その 3 「会話」：会話とは、言い換えれば情報交換と言えるでしょう。アラ 50 では直接の会話が情報交換の場でした。これは机上の会話のみを指しているのではなく、屋上ビアパーティー、寮祭（各寮室）、弁論大会、マラソン大会、レガッタ大会、観楓会などの厳鷺寮恒例季節イベントが毎時企画され、そこでの会話（情報交換）が盛んであったことを思い出します。一方、アラ 100 では、発達したネットワークの利用を主体として、情報交換の方法が大きく変化しています。直接の会話がなくても電子メール、LINE さらには Zoom などの Web 会議システム

を用いた新しい社会交流の場が作られています。姿を変えた”Be social”がそこにあると言つて良いでしょう。

ここに3つの「飢え」を示しましたが、その変遷の中にも本寮のモットーがしっかりと受け継がれています。100年を超える世代には新たな「飢え」が生まれるでしょう。どんな「飢え」か想像してみるのも、寮生活を見守る上で楽しい事柄です。

さて、現在の役員は、アラ50を中心としたロートルが占めてきました。しかし、これからはアラ50では対処の難しい「飢え」が待ち受けている気がしています。創立100周年を目前に、新たな「飢え」に抗うため、アラ100の役員参入が必須と思っています。

2024年3月で、清野佑弥くん、浅井海晴くん、白勢央樹くんが卒寮しました。それぞれの道で切磋琢磨されることを望みます。2024年4月には石渡春奈さん、吉田彩乃さん、加藤陽くんを新入寮生として迎えました。寮の新しい歴史を作ってください。





# 2024 年度巖鷲寮誌

## 目 次

卷頭言 習長として .....	.....	寮長 細田 悠平 ... i
「飢え」を考える .....	.....	理事長 昆 泰寛 ... iii

### 〈特別寄稿〉

あの春、日高の稜線で

カムイエクウチカウシ山から札内岳への縦走 .....	.....	米田 啓祐 ... 1
南部藩士の足跡を訪ねて .....	.....	中川 大介 ... 13
ヘルシンキ茶話 .....	.....	横澤 宏一 ... 21
バスケットボールの審判と会社人生 .....	.....	佐々木 美広 ... 26
私の宮澤賢治 .....	.....	猪狩 昌和 ... 35
小川博三先生の思い出 .....	.....	関口 信一郎 ... 42
佐藤、新渡戸が信じたキリスト教 .....	.....	小澤 和男 ... 47

### 〈寮生のページ〉

寮生近況

.....	57	.....	58
.....	59	.....	61
.....	62	.....	64
.....	65	.....	66
.....	67	.....	69
.....	71	.....	72
.....	73	.....	75
.....	77	.....	78
.....	79		

### 〈一心会のページ〉

北大の横田篤理事・副学長がご講演 .....	.....	82
------------------------	-------	----

東京一心会だより	83
「巖鷦鷯一心会」早わかり	84
訃報	86
 〈法人のページ〉	
2023年度一般財団法人巖鷦鷯事業報告書	87
資料1：2023年度損益計算書	91
資料2：一般財団法人巖鷦鷯定款	92
資料3：一般財団法人巖鷦鷯規則	98
2024年寮日誌	100
2024年度巖鷦鷯役員名簿	101
 2024年度寮生名簿	102
編集後記	103



表題題字：佐藤 昌介（男爵、日本初の農学博士、北大初代総長）

カット：中原 ひさみ

▶ 特別寄稿

## あの春、日高の稜線で カムイエクウチカウシ山から札内岳への縦走

米田 啓祐

昨年度の「寮生近況」に使った写真を見た本誌編集委員長から、「その写真を撮った登山について投稿してもらいたい」と依頼があった。そこで、今から2年前に書いた当時の記録を少し読みやすく編集して投稿させた頂くことにした。元の記録は文末のURLにて公開しているので、写真や細かい地図と併せて読みたい方はこちらを読んでみてほしい。

その写真の登山というのは、2023年3月の日高山脈の縦走である。カムイエクウチカウシ山（以下カムエク）の八の沢左岸尾根からカムエク山頂にアタック。そこから北上し、東西稜線に乗り、十勝幌尻岳から下山するという計画だった。もちろん我々は山スキ一部であるので、その縦走の折々でスキーをするつもりであった。

### 20年間なかつた積雪期の日高の縦走

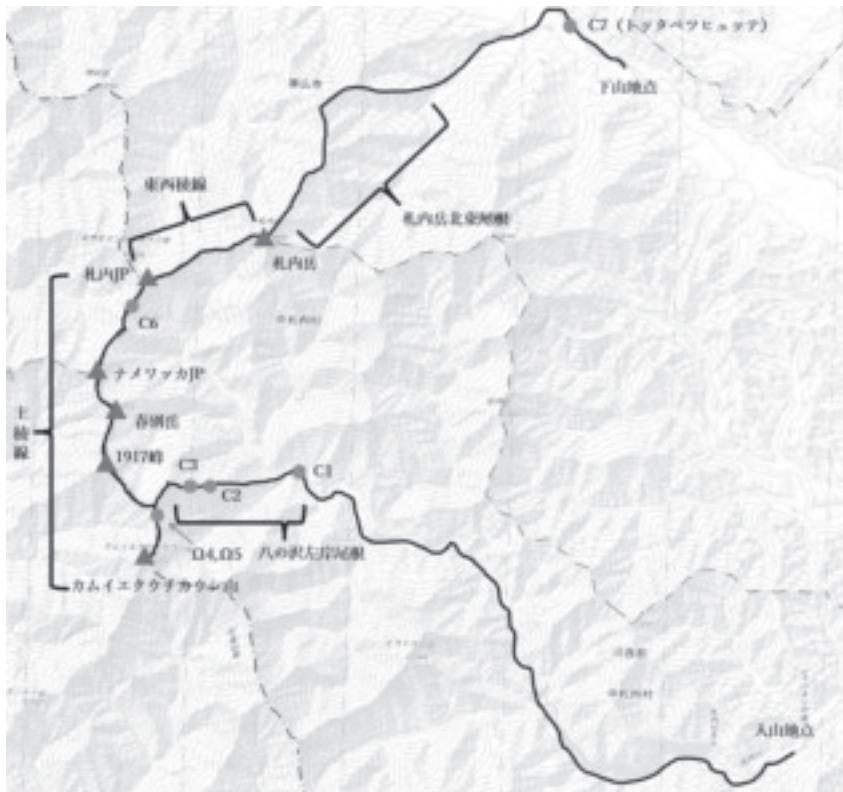
この記録について語るにはこの山行のさらに2年前から話を始める必要がある。

2021年3月、当時山スキ一部2年目であった米田は、メンター的存在だった2



カムエクピークにて。左から米田、加賀谷、徳井

つ上の先輩2人と同期の加賀谷と一緒に、この登山を計画していた。積雪期の本格的な北中日高の縦走はかつて山スキ一部において盛んに行われていたが、部員の減少に伴う部全体のレベルの低下や、趣向の変化などに伴ってここ約20年行われていなかった。「自分たちがやりたい山



行動概要・地図

をやる」という気持がもちろん一番大きかったが、険しい稜線を歩き深い山に入り、究極の一本を滑る、というかつての記録を掘り起こす計画でもあった。

部活では、この規模の縦走をするにあたっては、プレ山行<sup>1</sup>をいくつかこなさなければならない。この時も1か月以上かけて、小樽赤岩でのEP<sup>2</sup>訓練、八剣山でのロープワークとEP訓練、三段山～NPR～

富良野北尾根の縦走、ニペソツ山の乗越<sup>3</sup>という、決して簡単ではない全てのプレ山行を完遂させていた。そしてあとは日高に挑戦するだけというここまで来ていた。

しかし、同年2月28日、上川岳に入山していた部員二人が雪崩に巻き込まれるという遭難が発生。幸い救助され命に別状はなかったが、山スキー部としては

<sup>1</sup> 技術や体力や経験の向上を目的とする、別の山行のための準備山行のこと。

<sup>2</sup> アイゼンとピッケル。いずれも雪山での道具。

<sup>3</sup> 登った尾根とは別の尾根で下ること。

1972年に起きた旭岳での雪崩事故（5名死亡）以来の大きな事故となった。報告会と会議、話し合いが連日行われ、全ての活動は1ヶ月以上停止。相当の覚悟と憧れをもって取り組んできた4人の夢は、挑戦することさえ叶わず幕を閉じた。仲間が死にかけたというショックと、情熱を捧げていたものが忽然となくなってしまったことへの喪失感に呆然としながらも、「自分が上級生になったらこの山行を必ず成し遂げよう」と心に決めたことを今でも覚えている。きっと同期の加賀谷も同じような気持ちだったと思う。

### プレ山行で「センス」を合わせる

そしてそれから2年後の2023年3月、米田がリーダー、加賀谷がサブリーダーとなり、そこに一つ下の後輩の環と徳井が加わる形で同じ計画の登山に挑戦することになった。

計画は3か月前の前年12月から始まった。何日間の行程で臨むのか、山域の様子はどうか、核心はどこで何が難しいのか、稜線上のどこに泊まれるのか、テントで泊まるのかイグルー<sup>4</sup>に泊まるのか、装備は何を持っていくのか、どのような天気の条件で進むのか…。過去の記録を読み漁り、あらゆる状況を想定して頭の中で日高の稜線を歩きながら、真っ白な地図に自分たちのルートを描いていく。パ

ーティと意見を交わしながら、自分たちのイメージが形になっていくこの時間は最高にワクワクする。この時から登山は始まっているといつても過言ではない。

計画がある程度固まれば、次はプレ山行の計画だ。日高に必要な技術、経験はどういうもので、その中で自分たちに不足しているものは何なのか。それを補うためにはどんなプレ山行が必要なのかを話し合った。もちろん自分達だけではなく他の部員との話し合いを重ね、OBの方々からもアドバイスを頂いた。

そうして全てのプレ山行と日高縦走の計画が完成した。

プレ山行として登った八剣山、芦別北尾根はどちらも大成功。本番に必要な技術や装備の確認をしつつ、パーティ内で「センス」を合わせていった。この「センス」というのが意外と大事で、「センス」があつてると、言葉を交わさなくてもお互いの考えていることがある程度理解できたり、次の行動を把握出来たり、どんな危険を予測しているのか共有出来たりする。パーティの熟練度ともいえるだろう。今回の4人は今回の一連の登山以外でも一緒に山に行くことが多く、部内ではかなり「センス」があつている4人だった。

しかし、プレ山行が終わった直後、環が肩を脱臼。負傷による離脱が決定した。こ

<sup>4</sup> 雪のブロックを切り出して作る雪洞のようなもの。風の強い細い稜線上ではテントを張ることが

できないため、イグルーを作成してその中に泊まることがある。

ここまで共に頑張って来た仲間だっただけに離脱はかなりの痛手だった。しかし、こうなつたらもう3人で頑張るしかないと腹をくくった。

考えられることは考えた。やるべきこともやった。あとは情熱をもって、精一杯挑戦するだけ。そんな気持ちで日高の旅が始まった。2頁に示した図がその登山計画で、以下がその記録である。

## 1日目

Day.1 ピョウタンの滝～八の沢左岸尾根  
末端=C1<sup>5</sup>（行動時間 7h45m）

冬の登山は登山口ではなく最終除雪地点から、今回は道道111号線のピョウタン覆道からはじまる。登山といいながら、今日は登らない。除雪されていない道路を12km歩き、その後結氷した川を5kmほど歩くとたどり着く、八の沢左岸尾根の末端が今日の目的地。登り始める尾根にたどり着くまでに丸1日かかる。この遠さが日高の魅力でもある。30kgに迫る冬山装備、計14日分の燃料と食料が肩に食い込むのを感じながら、ここまで運転してくれた環の見送りを受けて、八の沢出会いに向かって出発する。縦走の始まりはいつも、それまでかけてきた準備や気合

や緊張の割に、緩やかに、肃々と始まる。

序盤はトンネルが頻繁に出てくるのでスキー板<sup>6</sup>を外してツボ<sup>7</sup>で歩く。本来通行止めになっている山間部特有の長いトンネルには、電気は一つもついていない。足元すら見えないし、トンネル特有の怖さもあって結構びくびくしながら歩く。トンネルを数個やり過ごし、札内ヒュッテを過ぎてからはほとんどシール<sup>8</sup>で歩く。七の沢以降の沢はすべて氷結しており川の上を歩いたり対岸に渡るのに問題なかった。八の沢左岸尾根の末端の今日の幕営地<sup>9</sup>はラジオも電波も入らないが平らで快適。テントを立てて泊まることにする。川が近くに流れているので水の調達も楽だ。初日から結構疲れてしまった。沢の底から見上げる稜線には雪煙が立っていて、稜線上の風の強さを感じさせる。午後からは沢にも風が吹き抜けるようになった。なんだか暖かい。

## 2日目

Day.2 C1～尾根上標高1450=C2（行動時間 9h15m）

この日は標高700mから1700mへ一気に上がる、気合の一日である。6:00、左岸尾根を登り始める。序盤がかなり急で

<sup>5</sup> Camp（キャンプ）の略。一日目はC1、二日目はC2...と増していく。

<sup>6</sup> 山スキー部は通常、スキー板を履いて行動する。スキーの裏側に「シール」と呼ばれる装備を付けることで、坂でも後ろに滑ることなく登って行ける。

<sup>7</sup> スキー板を外した状態。スキーブーツで歩くこと。

<sup>8</sup> スキーの裏側に張ることによって斜面でも滑らず、登れるようになる装備。

<sup>9</sup> 泊まる場所の事

あり場所によって斜度は 50 度を超えて いる。尾根は細く、笹やタンネ<sup>10</sup>がたくさん茂つていて、快適に標高を上げるこ とができるない。2 時間半経って地図を見ると なんと 100m しかあがっていない。疲労からかこの衝撃的な事実になんの感情も生まれなかつた。もはや諦めの境地。

昼が近くなると気温が上がり、雪がグズグズになり足元が崩れ、さらにシールに下駄<sup>11</sup>ができる。汗まみれになりながら、踏み出してはずり落ち、踏み出してはずり落ちを繰り返す。時折つくため息が皆深い。標高 1200m 以降は若干傾斜もゆるくなり、1300mあたりから樹林がまばらになり歩きやすくなつたが、結局この日は標高 1450m で息絶えた。750m 登るのに 8 時間 30 分かかるという体たらくである。

疲れた体に鞭を撃ち、スコップを使つたり踏み固めたりして、斜めな地形をなんとか平らにしてテントを張る。体の節々が痛むし疲労感がとてつもない。ほかの団体や過去の記録はこれほど難儀していないようだったが、雪が悪いのか、荷物が重いのか、我々が弱いのか…。おそらくその全てなのだろう…。

さて、ここで少し冬のテント生活について紹介しよう。

まずテントに入る前に「エッセンブロ

ック」を作る。踏み固めた雪を、大体鍋に入る大きさのブロックに切り出したものがエッセンブロックである。これを溶かして、飲み水や食事に使う。30 ℥ の袋がいっぱいになるくらいの量が必要だ。それが終わったら全員テントに入り、テントの中でブーツを脱ぎ、ブーツのインナーをテントに吊るして乾かす。この時、ブーツに着いた雪を落とさずにテントの中に入ると氷盤を買う。また、インナーが臭くても（臭くない奴など居ないのだが）、氷盤を買う。自分の荷物や銀マットをそれぞれ整理して居心地がよくなったところでドラゴンフライ<sup>12</sup>を付け、晩ごはんと朝ごはん用の水、翌日の行動水をつくる。それが終わったら飯を作り、体が温まっているうちに寝袋に潜り込んで眠る。文字で書くとあつという間だが、こうした作業にパーティの熟練度が出る。テント内生 活の熟練度はそのまま快適さにつながり、快適さはパフォーマンスに関係してくることも多いので意外と侮れない。

そんなこんなをして 19 時頃になると、娯楽も大してなく、ゆっくり暖まるほどの燃料もなく、明日も朝が早い我々は寝袋に潜り込んで寝てしまう。強風に叩かれるテントがバタバタと揺れる音を聞きながら、泥のように眠る。

<sup>10</sup> 針葉樹林のこと。トドマツなど。

<sup>11</sup> シールの裏側に雪が固まって着くこと。雪が付くとシールが動かず歩きにくいうえにかなり重い。

<sup>12</sup> MSR 社の火を起こす製品。山スキーパークでは燃料に灯油を用い、暖をとるために使う。

### 3日目

Day.3 C2～尾根上標高 1750=C3（行動時間 2h）

朝起きると強風。天気予報的にも気圧配置的にも好天は望めないということで、今日は本来の予定幕営地であった樹林限界<sup>13</sup>の標高 1750m まであげて行動をやめにしようということになった。溜まった疲労の回復という意図もあった。この日はなんだか全員調子が悪い。米田は頭痛、加賀谷は鼻水とめまい、徳井は腹痛と鼻水と寒気とフルコンボだった。

標高 1570m からはまばらにカンバ<sup>14</sup>が生え、平らな波打つ尾根となる。衛星写真からスキーが出来そうだと目星をつけていた斜面は白抜け<sup>15</sup>でいて楽しそうだったが、この日は雪が固そうであった。標高 1750m 付近のくぼ地で 10:00 にテントを張る。吹きさらしで風にはあまり強くなさそうな地形だったが、明日は風が弱まりそうなのでここで幕営。

テントに入り各自読書タイムへ。徳井は「旧約聖書がわかる本」を持ってきており、天地創造の部分を読み聞かせてくれたがなかなかいい。12:00 には停滞<sup>16</sup>用のチャイを飲む。華やかな香りで癒される。ダラダラしたのち徳井はパブロンを服用

して寝る。

### 4日目

Day.4 C3～尾根分岐～カムエク～尾根分岐付近=Ω4<sup>17</sup>（行動時間 8h30m）

朝、徳井のお腹からとんでもない音が聞こえる。起床してすぐテントの外へ。テントは壁が薄く、聞きたくない音も聞こえてしまうのが欠点である。結局最終日までおなかの調子は悪かったようだ。

出発後、標高 1850m くらいから SE<sup>18</sup>に換える。振り返ると雲海が沢を埋め、雲の切れ目から突き抜けるようにいくつもの山がそびえていた。薄いガスの向こうに見える景色はまるで水墨画のようで、どこを見渡しても山しか見えなかった。ずいぶん深くまで来てしまった、簡単には帰れないな、というちょっとした恐怖感のようなものが少し心地よかつた。

標高 1850m の屈曲からアイゼンを装着。標高 1903m までの間に岩稜<sup>19</sup>が少し出てくるが、岩の基部を迂回してトラバース<sup>20</sup>ができるので特に難しくはない。4 日目にしてようやく主稜線に到達した。

しかしこの頃には全く視界はなく、50m～100m くらい先しか見えない。カムエク山頂にアタックしたかったが、とりあ

<sup>13</sup> 樹木が生息できる限界の標高。樹林限界より高くには木は生えていない。

<sup>14</sup> 広葉樹林のこと。ここではダケカンバ。

<sup>15</sup> 斜面に樹木が生えていない状態。

<sup>16</sup> 天候などを理由に行動しない日の事。

<sup>17</sup> Ωはイグルーのマーク。4 泊目はイグルー泊だ

ったという意味。

<sup>18</sup> シーアイゼンのこと。スキーに取り付ける登攀道具。

<sup>19</sup> 岩がでている稜線。

<sup>20</sup> 斜面を横に移動すること。



### イグラーの中で停滞する

えず分岐の30mほど南側にイグラーを掘ることにする。掘っている最中も視界が悪く、一寸先は白。今日はカムエク行けないのか…などと思っていたが、イグラー完成直後から徐々に視界が開けてくる。視界が良くなることに賭けて、急いでアタック用に装備を詰め替えていると、雲がどんどん押し上げられて、さっきまで真っ白だった空間に徐々に巨大な山の姿が。こんな近くにカムエクは

あつたのか、と圧倒される。

その存在感と厳かな容姿に心躍らせながらいざ頂へ。

すべてアイゼンで登るような尾根だったのでスキー板は必要なかったのだが、「我々は山スキーパーである」という加賀谷の矜持で全員スキー板を担いで山頂に行くこととなった。標高 1900m 付近までは尾根が広く容

易。標高 1900m 以降は局所的に岩が出てくるが、カムエクの登りで緊張するのはそのワンポイントのみだ。

この辺りではガスは晴れ、360度見渡せるようになっていた。

そしてカムエクの頂に立った。目の前に広がる南に続く主稜線といくつもの頂、これから臨む1917峰、春別岳、札内岳。ずっと立ちたかった頂、ずっと見たかった景色を前に感無量。湧き上がる感情を正しく表現できる言葉が見つからない。

ただ、心の底から嬉しかった。

ひとしきり余韻に浸った後、暖かいし風もないでのんびり撮影大会をした。お腹を壊している徳井はコイボクカールと南西稜を臨んで渾身の脱糞。全てを征服したような気分になったようだ。

何度も振り返りながらピークを離れ、



分岐からカムエク山頂を仰ぐ

イグルーへ帰る。会心のアタックが出来たときの帰り道ほど充実感にあふれたものはない。テンバから改めて見るカムエクの容姿はやはり荒々しく美しい。一瞬の晴天を突いた素晴らしいアタックであつた。贅沢な疲労感を味わいながらゆっくりと眠りにつく。

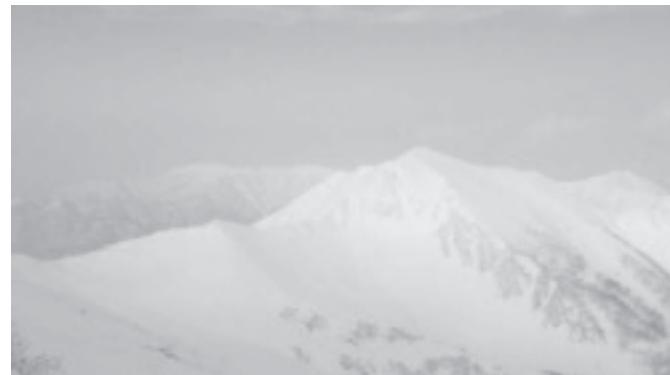
ちなみにこの頃になると、凍った寝袋で寝ることが多くなる。寝ている間に体から出る蒸気を寝袋が吸い、それが行動中に凍ってしまうのだ。寝るときにはその凍った寝袋をパリパリと広げながらその中に足を突っ込んで寝ることになる。冷たさも濡れも、感じる前に寝てしまえば問題ないのである。

## 5日目

Day.5 Ω4=Ω5 (完全停滯)

6:00 に外に出るも視界 50m ほどでとりあえずイグルーに戻る。7:00、7:30 と外に出るが視界は変わらず少し風も出てきた。最後まで粘っていた加賀谷も折れて、今日は 1 日中停滞することとする。

各自読書や昼寝に興じる。特にやることもなく、薄暗い雪洞の中でこれからのこととかをぼんやり考える。周囲数キロに



## 九の沢カール

他の人間がいない世界で、吹き荒れる冬の稜線の上で、イグルーの中でひっそりと過ごしている。自然に翻弄され、自分たちの思い通りにはいかないこの瞬間は、きっと本来の自然と人間のバランスなのだろう。圧倒的な自然を前に人間の非力を感じるこの時間は、案外嫌いじゃない。

今日も 12:00 にチャイの香りが広がる。徳井の聖書の読み聞かせはノアの箱舟、バベルの塔まで進んだ。徳井は旧約聖書の面白さに気が付いてしまったらしい。

## 6日目

Day.6 Ω5～c1917～春別岳～ナメワッカ JP～10.5 の沢上=C6(行動時間 7h)

6:00 に外へ出るが昨日と景色は変わらない。今日もダメか…と思いながら一応パッキングを進める。するとカムエク、分岐、主稜線が雲の隙間から現れたりまた消えたりして、視界が開ける気配がし

始める。20分もするとすっかり雲もなくなり幌尻岳まで望むことが出来た。キリリと締まった空気の中、意気揚々と出発する。

スキー滑走が出来そうだとみていた九の沢カールは、艶やかな白いパウダーを湛えておいでおいでしていた。しかし、環が離脱し3人になったことにより、雪崩レスキーにおける脆弱性が大きくなつたため、難しい斜面でのスキー滑走はしないということを事前に部活として決めていた。例えそうでなかつたとしても、今回の縦走の中にカール滑走を組み込めるほどの実力は我々にはなかつたかもしれない。ということで、今回はカールの滑走はできない。悔しいのであまり見ないようにして通過する。

コルから標高1800mまでは、昨日の風雪の影響もあってか、細い雪の尾根になっていた。こうした地形は雪の下に地面がないこともあるため、慎重に歩を進めていく。右に寄りすぎれば踏み抜いて滑落、左に寄りすぎれば崖から滑落なので緊張する。

そこを超えると、「ピナクル」と呼ばれる細い岩稜帯が待ち受けている。



ピナクル

東側の5mほどのルンゼ<sup>21</sup>を登ることにしたのだが、雪が吹き溜まっていて斜度もきつかったので雪崩が怖い。一歩一歩緊張する。二番目に登る徳井の足元は崩れ、小規模な雪崩も起きていた。

ピナクルを超えて1917峰に立ち、さらに春別岳へ向かう。わざわざ1917mまで上げた標高を200m近く下ろし、そこからまた150mほど登らなければならぬ。

このセクションの登りは岩稜がずっと続くので、岩の上にアイゼンの爪を立てての突破や、岩の基部のトラバースをひたすら繰り返す。雪庇の崩落や踏み抜き、雪崩や滑落に気を付けてひたすらこなしていく。疲労が蓄積し、段々と集中力がそがれていく。

そのせいで判断力が鈍っていたのか、ルートを誤り一度滑落しかけた。斜面に刺した右手のピッケルと、たまたま掴めた左手のハイマツにしがみついたまま両

<sup>21</sup> 岩壁の、縦にえぐれている溝のこと。



1917 峰付近からカムエクを振り返る

足が宙に浮いて、岸壁にぶら下がるような感じになっていた。見ていた徳井は5割くらいの確率で死んだと思ったらしい。危うく谷底に落ちて札内川のイワナたちの餌になるところであった。

そんなこんなで春別岳のピークに着いた頃には、疲れが溜まってくるのに加えて、視界が悪くなり風が出始めた。パーティのテンションはさがっており、会話も弾まない。

今日の行動はまだ終われない。ナメワッカJP<sup>22</sup>へと向かう。表面は固く凍っているのに、足をのせるとズボッと踏み抜くような雪質。一步踏み出しては埋まった足を引き抜き、また踏み出して引く抜く。これをただただ繰り返す。発狂しそう

ナメワッカJPに着くころにはみんななくたった。風も強くなり、ヘロヘロになりながら 10.5 の沢カールまで舞い降りる。イ

グルー泊の予定だったが、風や雪の影響を受けなそうない感じの場所があったのでテント泊とする。良く歩いた。疲れた。

## 7日目

Day.7 C6～札内 JP～札内岳北東尾根～ペリカペタヌ沢～トッタベツヒュッテ = C7 (行動時間 12h30m)

5:30 にテントを出る。濃紺な空に、赤い地平線が良く映える。この一週間で初めて見る、そして唯一の朝焼けだ。

札内JPまでは岩なども出ておらず簡単だが、吹き付ける風によって形成された、波打つカリカリの尾根。天気はいいのだが風が強く、西から絶え間なく強風が吹きつけて寒い。札内JPで余韻に浸りたかったが、寒いのでそそくさと東西稜線へ。主稜線さようなら、ありがとう。

東西稜線の序盤は岩が出ているので、スキーではなくアイゼンで下る。岩の基部の基部の木が茂っているところをトラバースするのだが、雪が深くズボズボ足がハマるわ、ザックに付けたスキー板が木に引っかかるて後ろに引っ張られるわでとても不快。この辺りは雪庇が大きく発達しているという情報があり心配だっ

<sup>22</sup> JP はジャンクションピークの略。稜線の分岐が

山の頂上になっている地形。

たのだが、それほど緊張する場面はなかった。今年は雪が少なかったのだろうか。

アイゼンのズボズボが辛すぎて標高1816mからはスキーにする。ズボズボしない！やはり板は偉大だ。結局札内岳まで全部シールで行けた。

最低コルあたりでようやく風が弱くなり、ほっと一息。札内ピークまでは尾根も広く容易で、何度も振り返りながら歩いた。札内岳頂上に着いて写真撮影。札内は「日高の展望台」と言われるだけあって、日高の稜線が全て見渡せる。

昨年仲間と歩いた稜線、自分たちが昨日まで歩いてきた稜線、まだ歩いたことがない稜線…。7日間目覚ましで使っていたブルーハーツの歌が自然と頭の中で流れる。ようやく会心の「青空」であった。

今後の行動について3人で話し、「今日頑張ればヒュッテまで降りられるのではないか」ということになり気合で北東尾根を下まで降ろすことに。

日高の稜線さようなら、ありがとう。

序盤の急なところはツボでおろし、あとは標高1590mまではシール。他にも下降尾根はあるのだが、以前この3人で通ったことのある尾根だったのでその尾根を使うことにした。

今までの緊張感や疲れが一気に来たのだろうか、ここにきて米田・加賀谷ともに戦闘不能状態に。次の一步が出来ない。今までトップを歩かず体力を温存していた徳井が引っ張ってくれて助かった。ここ

からはただの尾根をスキーで滑って下山するだけなのだが、ただただしんどい。すぐには太腿がパンパンになり、自分の足なのに思うように動かせない。1ターンごとに呼吸を整えながらなんとか降りていく。4年間で初めて下山でスキーしたくないと思った。ここでも徳井が引っ張ってくれて何とか降りる。

やつとのことで尾根を下り終わる。あとは平坦な沢沿い降りていくだけ。もう登らなくていいし、もう滑らなくていいんだという解放感と、日高の深部から安全圏まで帰ってこられたんだ、という安心感ですっかり脱力して座り込んでしまった。二人のへなへなした笑顔を今でも覚えている。きっと自分もそんな顔をしていたに違いない。

しっかりと休憩した後、ラテルネをつけてヒュッテまで。気が付くと月が出ていた。川のせせらぎを聞きながら月明りに照らされて暗闇の中を歩いていると、何とも感動的な気分になる。今回の登山を思うと、いつもと違うこういう下山がふさわしいような気もする。気が付けばラテルネがいらぬほど月は明るくなつて、いくつも星が光り始めていた。さつき加賀谷が呟いていた、「卒部か…」という言葉がなかなか頭から離れず、4年前に入部してからことをいろいろ思い出しながら歩いた。2人はいつたい何を思い、何を考えながら歩いていたのだろう。

河原は林道に変わって、そしてヒュッ

テが見えた。徳井と握手を、加賀谷と抱擁をした。中に入つて薪ストーブをつけて、久しぶりの暖かさを享受した。残つた飯をいっぱい食べて、寝ながら 7 日間の出来事を 3 人で話した。夜はどんどん更けていった。こうして山行は、部活は終わっていくんだな、と思った。

## 8日目

Day.8 C7～最終除雪地点（行動時間 30m）

朝、ヒュッテの外は春の陽気だった。窓から差し込む光にほつとする。下界に降りてきたんだな、と感じてうれしく思うのと同時に、もう少し居たかったなという思いも芽生えてきた。今年は稜線上にいても、帰りたいと思うことはほとんどなかった。

最終除雪地点まで歩くと、また環が迎えに来てくれた。温泉に入って飯を食つて、OB のお宅にお邪魔させていただいた。暖かい食事と酒をふるまつていただき、さらにその日は泊まらせていただいた。いつもこういう場で楽しそうな徳井は、雪目による目の激痛と戦つていて元気がなかつた。満腹とアルコールの眼氣の中で、改めて良い山行だった、無事に帰つてこられて良かった、としみじみ感じた。色々な人に感謝しているが、やっぱりパートナーの 2 人には誰よりも感謝したい。本当にありがとう。これからも頑張ろう。

以上が記録である。過去に終わつた山行を語ることは好きではないが、改めて書くと懐かしい。

あの時、あの 4 人で、あの場所で共にしたこと全てはもう二度と起こりえないことで、それがこの思い出を特別なものにしてくれていると感じる。きっとこれからも思い入れのある登山やもっと難しい登山をたくさんすることになると思うが、この思い出はずつと色褪せることも、忘れることも無いと信じている。

Schi heil. ↪

## 記録

<https://www.yamareco.com/modules/yamareco/detail-5252849.html>



よねた けいすけ

青森県出身

北海道大学文学部修士 2 年

北海道大学体育会山スキー部 OB

## 南部藩士の足跡を訪ねて

中川 大介

私の住む北海道函館市に「南部藩士の墓地」があります。函館山山麓の元町に建つ観光名所の旧函館区公会堂から西へ約1.5キロ。函館湾を一望する船見町の高台に、12基の墓石と「南部陣屋箱館詰藩士之墓」の碑が立っています。

風雪に削られた墓石が歳月を物語ります。江戸時代後期、幕府の命で蝦夷地警備に就き、事故や病で落命した南部藩士たちの墓です。明治後期から慰靈につとめてきた旧藩領出身者らが墓石の散在と荒廃を見かねて1937(昭和12)年、この地に集めたのだと傍らの説明板にあります=地図①参照。

函館に初めて住んだ20年ほど前、この近くにある外人墓地を訪れて南部藩士の墓地の存在を知り、旧藩領出身者の一人(岩手県釜石市出身です)として取材の機会をうかがっていました。2022年に約30年間勤めた北海道新聞社を退職してフリーライターとなり、22年から23年にかけて北海道新聞の道南版で「道南歴史を歩く」と

いうシリーズを書く機会を得ました。歴史の現場となった場所を実際に歩き、身近な風景のなかに織り込まれた史実をたぐってみよう—という1ページの連載です。

念願かなって23年2~4月に計3回、南部藩士の記事を出すことができました。江戸後期から明治の初めにかけて、蝦夷地へ渡った南部藩士たちのストーリーで



函館市内の南部藩士の墓地

す。取材をつうじて目新しい発見があつたわけではなく、ご存じの方も多い話だと思います。ですが、南部藩にルーツをもつ佐藤・新渡戸記念寮に暮らす寮生やゆかりの皆さんに先達の足跡を知つてもらいたく、連載を再構成してお伝えしようと思います。



地図①

なお、南部藩は「盛岡藩」とも呼ばれますが、本稿では一般に定着している南部藩の呼称で統一します。国立国会図書館などが運営するレファレンスサイトには、江戸後期の1817（文化14）年、南部藩が同藩を盛岡藩と改称する旨、幕府に届けたとの情報が掲載されています。

### 不運の砲術師

南部藩は18世紀末～19世紀初頭と19世紀半ばの2度にわたり、蝦夷地の警備

に就きました。ロシアをはじめとする外國勢力の来航に危機感を覚えた江戸幕府が北方に目を向け、蝦夷地を松前藩から召し上げて幕領（直轄領）とし、東北諸藩に警備を命じたのです。

1度目は「第1次幕領期」と呼ばれる1799（寛政11）～1821（文政4）年。アイヌ民族の蜂起「クナシリ・メナシの戦い」（1789年）や通商を求めるロシア使節ラクスマン来航（1792年）などが引き金となり、幕府は南部藩や弘前藩（通称津軽藩）などに蝦夷地警備を命じました。南部藩は箱館（現函館）に拠点となる「元陣屋」を置きつつ、日高地方の浦河以東、択捉島までの広大なエリアを受け持ちはます。岩手県立図書館には、このときの南部藩の警衛地を描いた絵巻物が残っていますが、久奈尻（国後）、根諸（根室）、厚氣志（厚岸）、美楼（広尾）、砂馬荷（様似）など、まあよくもこれだけ遠方に人を出したものだと驚かされます。

と同時に、宿舎や防寒具、食料など十分な備えもなく派遣された藩士たちの苦労がしのばれるのです。記者時代、北見市や釧路地方の厚岸町などで勤務した経験から道東の気候の厳しさは身に染みてわかります。待っても待っても春が来ない。そんな極寒、遠隔の地に長い道のりを経て赴き、任に就いた藩士らの望郷の念が思われるのです。

この第1次幕領期、南部藩がかかわる

重大事件が樺太（現サハリン）や択捉島などで起きました。1806、07（文化3、4）年、通商要求に頑なに応じない幕府の対応に立腹したロシア使節レザノフの命でロシア船2隻が来襲し、銃撃や略奪をおこなったのです。択捉島では上陸、発砲するロシア人の前に幕吏や南部、弘前両藩の藩士からなる守備隊はあえなく敗走してしまいます。指揮官だった幕吏の弱腰が主要因のようですが、太平の世に慣れれた武士の実戦能力の劣化や装備の陳腐化を世に知らしめた「文化露寇（ろこう）」でした。

藩士のなかに捕虜となった者がいました。南部藩砲術師の大村治五平です。同島紗那で警備にあたっていた大村は、負傷して身を隠し、ロシア人に斬りかかろうとしたところを捕縛され、ロシア船で連れ去られます。やがて利尻島沖で解放されますが、彼を「腰抜けだ」と批判する者もいて風当たりは強く、大村は藩や幕府による厳しい取り調べのち蟄居を命じられて藩内の寺で没します。

彼が門外不出として一連の経過を子孫に書き残した『私残記』（盛岡出身の直木賞作家森荘巳池が1942年に刊行）などによれば、すでに50代半ばで隠居の身だった大村は、お家の事情ではるばる択捉島まで赴かざるを得なかったようです。同年配であり、蝦夷地の厳しさを知る私は切ない思いに駆られました。彼は勝手に引き

下がつた自らの非を認めつつも、すべての責任が自身に押し付けられようとしていることの不条理に憤り、自身の境遇を「不運」と書き残しました。

一方で『私残記』は自身を捕らえたロシア人の様子を克明に記しており、冷静な観察眼の持ち主であったことがうかがえます。彼や他の捕虜の証言で来襲時の状況が明らかになるのですが、蝦夷地を統括する箱館奉行などが事実関係を誇張して幕府に報告していたこと也有って、海獸の毛皮猟に必要な不凍港を求めて南下する「ロシアの脅威」は実像以上に大きく伝わり、幕府は蝦夷地警備の強化をはかります。それは南部藩をはじめ東北諸藩にさらなる人的、財政的負担を強いていくことになります。

## 伝わる激動の波

南部、弘前両藩が幕府に命じられた派遣要員は、1799年当初は各500人程度でした。が、文化露寇によって「ロシアの脅威」を大きく受けとめた幕府は1807年、秋田藩、庄内藩も含め3千人規模に拡大します。同年の南部藩の出兵は1200人を超えたとされます。翌08（文化5）年には仙台藩（1700人）、会津藩（1600人）にも出兵させています。

各藩は箱館などに元陣屋を置き各地に「勤番」（守備隊）を配置しますが、厳寒と栄養不足による人的損耗は激しく、南部

藩では 08 年だけで七十余人が落命したとされています。多く見られたのは壞血病（ビタミン C 欠乏症）でした。本州としては寒冷な東北育ちであっても、蝦夷地では十分な備えなしに越冬するのは難しかったのです。幕領となるまで「外国」扱いだった蝦夷地の気候風土についての知識も不足していたのでしょう。

この時代、道東の斜里に入った弘前藩士や、苦小牧や白糠に江戸から入植した郷土集団「八王子千人同心」なども、同じように大きな犠牲を払っています。こうした実情を訴えて東北諸藩の蝦夷地警備は規模を縮小していきますが、函館の南部藩士墓地、苦小牧市の千人同心墓地をはじめ道内各地に残る古びた墓石を見るとき、現在の北海道の風景のなかに織り込まれた多くの命、そしてそれぞれの物語を思わずにはいられません。

幕府が恐れたロシアの再襲来は、結局ありませんでした。ナポレオンのロシア侵攻（1812 年）への対応を迫られてロシアの東方への関与が薄れ、また豪商高田屋嘉兵衛が活躍した「ゴローニン事件」の平和的解決もあって日露間の摩擦は沈静化し、幕府は 1821 年、蝦夷地を松前藩領に復します。

しかし、南部藩は「お役御免」とはならず、万が一に備えて青森の下北半島に守備隊を置くよう幕府に命じられます。長期にわたる派遣は藩財政をむしばみまし

た。幕府は 1808 年、蝦夷地出兵にともない南部藩を 10 万石から 20 万石に加増していますが、藩領が増えたわけではなく、むしろ格式上昇で支出が増大し、藩財政はいよいよ厳しくなりました。

拍車をかけたのが幕末の「第 2 次幕領期」におこなわれた 2 度目の蝦夷地出兵です。米国のペリー艦隊やロシアのチャーチン艦隊の来航に揺さぶられて幕府は鎖国を解き、米国に続いてロシアと 1855（安政元）年に日露通好条約を結びます。これにより千島列島の日露国境はウルップ島と択捉島の間で画定されましたが、樺太の領有問題は残り、全島領有を主張するロシアとの間で対立が深まったのです。このため幕府は同年（和暦では年の途中から安政 2 年に）蝦夷地と南樺太を幕領として東北諸藩に警備を命じ、のちに各藩に分割領有も認めました。「外国」扱いだった蝦夷地を「内国」化しようとしたのです。

南部藩は箱館から登別までを受け持ち、約 600 人を駐屯させました。第 1 次幕領期より負担は小さかったかもしれません。しかし長期に及ぶ支出で藩財政は悪化していました。藩は領民への増税や賦課金徴収で苦境をしのぎます。自然災害が多く飢饉が多発するのに、容赦なく取り立てられるのでは領民はたまりません。圧政が続く 19 世紀半ばに起きたのが百姓一揆の多発でした。

沿岸部では19世紀半ば、参加者が1万人を超す大規模な一揆が2度も起きています。有名なのが1853（嘉永6）年の三閉伊（さんへい）一揆でしょう。約1万6千人が加わり、うち約8千人超が仙台藩領へ越境して、自らの村を幕領または仙台藩領に加えるよう訴えたのです。その衝撃は大きく、参加者は要求の多くを南部藩に飲ませることに成功し、藩政改革にもつなげました。

この一揆の指導者の一人が栗林村（現釜石市）出身の三浦命助です。群衆を導いたのちに出奔。やがて舞い戻り、仙台、南部両藩の境にある「平田（へいた）番所」に現れて通報・捕縛され、1864（元治元）年に牢死します。命助は家族あての獄中記で、「恵みなき」南部藩領を捨てて、当時幕領だった蝦夷地へ向かうよう勧めています。幕府が直轄で産業を興し、東北からの労働力を受け入れて拓こうとした蝦夷地を、命助は理想郷と見たのでした。

「平田番所」のある釜石市平田地区は私の故郷です。小学校の自由研究で番所の歴史を調べて命助の名を知りました。彼は近世における民衆運動のリーダーとみなされ、釜石には顕彰碑もあります。近世の終わりに蝦夷地を襲った激動の波が東北に伝わり、民衆運動を高揚させてわが故郷をも震わせていたことを知り、蝦夷地・北海道と東北の深いつながりの一端を見る思いがしました。

命助が理想郷とみた蝦夷地でしたが、先住するアイヌ民族の目から見ると蝦夷地の「内國化」政策は文化の破壊にほかなりませんでした。幕府はアイヌ民族を酷使した松前藩の「場所請負制」を改め、搾取を廃して抱き込む政策を取りました。しかし、それは「下されもの」をアイヌの人びとに押し付け、和人の習俗への改俗を迫るものでした。私がインタビューした近世史の研究者は「明治以降に本格化するアイヌ民族への同化政策や、文化や民族性の破壊はこの時代に始まっていた」と指摘しました。

アイヌ民族を酷使した和人労働者のなかに、下北など東北地方からの出稼ぎ者も多くいたことも記憶にとどめるべきでしょう。

### 「製鉄の父」の足跡

国内外からの観光客でにぎわう函館市元町の函館山ロープウェイ山麓駅の近くに、「南部藩陣屋跡」の碑があります。第1次、2次の蝦夷地幕領期に南部藩が置いた元陣屋が、町を一望するこの地にあったのです。ここに向かう坂道には「南部坂」の名があります。

幕末・維新の激動のなかで、南部藩の蝦夷地警備は終焉を迎えます。南部藩は奥羽越列藩同盟に加わり、明治新政府軍と戊辰戦争を戦います。その戊辰戦争の最終戦となる箱館戦争の開戦を前に、箱館



南部坂と南部藩陣屋跡

詰めの南部藩士は 1868 (明治元) 年に箱館から引き揚げるのですが、この撤収に立ち会った藩士の一人に、後年「近代製鉄の父」と呼ばれる大島高任 (たかとう) がいました。

知られるように大島は 1857 (安政4) 年、現在の釜石市で洋式高炉による銑鉄 (粗製の鉄) の連続製造を日本で初めて成功させた鉱山・製鉄技術者です。彼も蝦夷地に足跡を刻んだ一人です。南部藩士の箱館撤収に先立ち、1862 (文久2) 年に大島は自ら願い出て箱館に赴任していました。幕府が、西洋の知識を吸収する場と位置付けた箱館に米国から鉱山技術者を招致し、鉱山開発と技術者の養成を進めようとしていることを知つてのことでした。

大島は箱館奉行の配下となり、米国人

技術者に同道して道内各地を巡検しながら採鉱冶金技術の伝習を受け、五稜郭の設計者として知られる幕臣武田斐三郎 (あやさぶろう)とともに箱館に鉱山技術者を育てる「坑師学校」を開きました。学校は基坂 (もといざか) 下の現海上自衛隊函館基地付近にあったとされますが資料は乏しく、詳細が明らかではないのが残念です。

武田斐三郎は、五稜郭や弁天台場に据える大砲の砲身を自前で造ろうと、箱館の東、恵山周辺にある古武井 (こぶい) で洋式高炉を設置して製鉄を試みますが、成功に至らず高炉は廃棄されました。この失敗の後で大島高任が箱館に着任し、古武井溶鉱炉を訪れているのです。歴史において「もし」は禁句ですが、釜石で土着の製鉄技術を下



地図②

敷きに西洋の技術を採り入れて洋式製鉄を成功させた大島がもっと早く古武井を訪れて、武田に技術的なアドバイスをしていたらーと、草に埋もれてゆく古武井溶鉱炉跡を訪れて、私は思いを巡らせました=地図②参照。



古武井溶鉱炉跡

1869(明治2)年に箱館戦争が終結した後、明治新政府は大島の知識と技術を捨て置きませんでした。大島は鉱山権正に任じられ、佐渡など各地の鉱山開発を指導し、東大工学部につながる鉱山学校「坑学寮」の開設を政府に提言しています。

### 労苦の上に

南部藩士が蝦夷地に残した足跡は、室蘭市や森町の南部藩陣屋跡などでも見ることができます。私は白老町の仙台藩白老元陣屋資料館、秋田藩が駐屯した増毛町の「元陣屋」、庄内藩が駐屯した天塙町

の「天塙川歴史資料館」なども訪ねましたが、どの藩も並々ならぬ苦労をしていることがわかります。稚内市で見た弘前藩士や会津藩士の苦難を伝える記念碑も、最北の地の風景とあいまって印象深いものでした。多くの弘前藩士が落命した斜里町の陣屋跡にも立ってみたいと思っています。

これら東北諸藩の藩士の足跡をたどれば、蝦夷地が東北の人びとの勞苦の上に拓かれていったことが実感できるでしょう。函館の南部藩士墓地は、今も函館地区岩手県人会が清掃と供養をしています。同会の関係者は私の取材に「幕府に忠誠を尽くしながら南部藩は明治維新で賊軍とみなされ、出身者はつらい時代を送った。苦労した先達の靈を慰めたいと供養を続けてきた」と語りました。各地の藩士墓地でも供養祭などが営まれています。

私自身は巖鷲寮で暮らした学生時代に北方史への関心は薄く、史跡を訪ねたことは多くありません。でも、記者として北海道の「現在」を取材するうちに、本州とは大きく異なるこの地の歴史に強く魅かれました。寮生、OBの皆さんにも道内の「歴史の現場」に立ってみることをお勧めします。△

<主な参考文献>

岩手県立博物館編『北の黒船』(岩手県文化振興事業団、2008年)

菊池勇夫『幕藩体制と蝦夷地』(雄山閣出版、1984年)

『釜石市誌 通史』(釜石市、1977年)

秋月俊幸『千島列島をめぐる日本とロシア』(北大出版会、2014年)

中村公一『大島高任と箱館英学』(釜石市鉄の歴史館、2014年)

『恵山町史』(函館市恵山支所、2007年)

岩手県立博物館編『近代へのとびら—大島高任の挑戦』(岩手県文化振興事業団、2016年)



なかがわ だいすけ

1986年北海道大学文学部卒業、卒寮。

メーカー、出版社勤務などを経て1992～2022年北海道新聞社勤務。

退職後、日本語教師をしながらライター・編集者として函館市で「編集工房かぜまち舎」を主宰。著書に『サケ学大全』(共編著、北大出版会、2013年)『水辺の小さな自然再生 人と自然の環を取り戻す』(農文協、2023年)など。

趣味はカヌー、山歩き、合気道。

## ヘルシンキ茶話

横澤 宏一

会社員時代にクラブに所属し、初步の茶道を学んだこともあって、大学に移ってから卒業式の日に大学の部屋で簡単な茶会を開くのを恒例にしている。自分の研究室の卒業生を招くのだが、この日は女子学生（たまには男子学生も）和服を着てくるので実によく映えるのである。使う茶道具はごく簡単なものであるが、大学に移って早々の2009年にフィンランドの大学（現・アアルト大学）の客員研究員として現地滞在した時にも持っていました。フィンランド滞在中に経験した茶道にまつわる話をいくつか紹介したい。

### 乱世の茶、泰平の茶

所属していた茶道部は表千家流の先生の指導を仰いでいた。数あるお茶の流派の中でも代表的なのは表千家と裏千家である。その所作はよく似ているが、表千家の時に大胆な所作を見ると、表千家は乱世の茶、裏千家は泰平の茶だと思うことがある。利休の孫である千宗旦は、時代が戦国から治世に移るのを見て、それまでの流儀を息子に譲って身軽になり、自らは屋敷の裏手に隠居して泰平の世にふさわしい纖細な所作を試したのではないか。宗旦の隠居所（今日庵）に始まる裏千家は、時代に合ったためか最大の流派

となり、国際化も積極的に推進して世界中に茶道教室や茶室を開き、日本文化の発信に大きな役割を果たしている。

### 大宗匠とセーラー服

裏千家の第15代家元は千宗室の名前を当代家元に譲って千玄室となり、今も大宗匠として活躍されている。その講演会が首都ヘルシンキで開催されたので、フィンランド人の同僚を誘って出かけた。立礼（椅子席）の茶席も設けられ、2階にある茶席の順番待ちの行列が、階段下まで延びる大変な人気であった。和服を着てくるフィンランド人までいる。行列に並ぶのは早々に断念したが、並んでいる



千玄室大宗匠と筆者〈向かって右〉

人の中に少なからずセーラー服姿の女子高生がいるのに気がついた。

フィンランドで制服姿を見ることはまざない。意外に思って連れのフィンランド人に「フィンランドの高校でも制服があるのか」と訊くと一笑に付し、「あるわけないだろ。あれは日本のアニメのコス

プレだ。」という。少し考えて合点がいった。日本文化の著名人の講演会に行くのに、日本らしい服装をしていくと考えた場合、和服を着てくる人もいれば、アニメの服装を選ぶ人もいるということである。これは勘違いなどではない。日本文化に対する敬意である。何より色白で手足が長く、金髪のフィンランド人にはセーラー服がよく似合う。日本人が着るよりもむしろアニメの世界観に近いのであった。

講演会には駐フィンランド大使も来ておられ、その紹介で大宗匠と直接お話しし、サインまで頂戴した。日本ではまずあり得ないことではあるまい。



持参した茶道具

## 要塞の中の茶室

講演の中で、大宗匠が監修してヘルシンキに作った茶室が紹介された。徳有庵という。調べてみると、正確にはヘルシンキ沖合のスオメンリンナ島にある。スオメンリンナは半日あれば歩いて1周できる小さい島だが、かつては重要な要塞であった。ちなみにスオメンリンナとは「フィンランドの城」という意味である。今は世界遺産に登録され、行楽地、観光地として整備されている。さらに調べると、徳有庵は普段は非公開でお茶の稽古が行われているのだが、7月初旬の週末に七夕茶会が催され、一般公開されるのである。早速行ってみることにした。

講演でも写真が紹介されていたが、茶室があるのはいかにも要塞らしい頑丈な石造りの建物の一室である。入り口は海側ではなく陸側にあり（要塞なのだから当然である）、かなりわかりにくく。表札のような小さい看板があるだけなので、通りかかってもまず茶室とは思わない。

おそらくは砲座が並んで据えられていた場所で、それほど広くはなく、中に茶室と水屋（準備室）がしつらえられている。天井は砲撃に耐えられるドーム型で、石



徳有庵の入り口

組みがそのままむき出しになっている。侘びとは少し違う、武骨で簡素な作りであるが、茶室としての美意識が細部にまで行き届いた茶室であった。

亭主側は日本人とフィンランド人が半々くらい。私以外の客はフィンランド人で、数名ずつ入れ替わり来訪し、日本語とフィンランド語と英語が入り混じる、一風変わった、しかし落ち着いたいい茶会であった。とは言え7月のフィンランドである。七夕茶会ではあるが、夜半まで空は明るく、星は見えなかった。

## ヘルシンキ芸術祭

7月の下旬には芸術祭があり、去りゆく夏を惜しむかのようにヘルシンキ中が芸術に染まる。映画館や劇場はもちろん、思いがけない場所でイベントが開かれてい

る。例えばヘルシンキで一番大きいストックマンデパートのショウウインドウに飾られている人形たちが、閉店時間と同時に突然踊りだしたりする。実は人形ではなく生身のダンサーがショウウインドウの中でじっと閉店まで動かずにとっていたのである。

市内の店では徳有庵で知り合ったフィンランド人の茶会が開かれた。裏千家で業軀（住み込み）を経験した本格的な茶人である。芸術祭の一環なので、お点前（お茶をたてる所作）もパフォーマンスである。通りに面したガラスの前に点前座がしつらえられており、本格的な着物姿で点前を披露する。解説者もついて説明をしており、通りには大勢の人だかりができていた。実際に茶会に参加する人はそれほど多くはなく、チケットを買うとそれほど待たずに入ることができた。客座は立

礼席で、5~6人分あり、正客以外のお茶は半東（助手）が水屋で点てて運ぶ。私の席が終わり近くなつた頃、茶碗を持った半東が何やらまごついて、亭主に話しかけている。どうやら数を間違えたらしく、一服余つたのである。私はたまたま正客座にいたのだが、こういうときにやるべきことは決まっている。「どうぞご自服を」と言った。むろん日本語である。亭主は落ち着いて一礼した。「お菓子もどうぞ」「いえ、お菓子は結構。お相伴いたします。」というやり取りがあり、亭主が自分で茶を飲むという、普段はあまりやらない所作を解説者が面白おかしく説明したらしく、通りがどつと沸いた。いつまでも日の沈まない夏の宵の、明るく楽しい茶会であった。

### ふじよばなし 不時の夜咄

私の滞在は9月末までで、ちょうど夜が昼より長くなり始める季節であった。日本でも「秋の日はつるべ落とし」などというが、夏は白夜、冬は極夜のフィンランドだと、日照が毎日短くなっていくのが実感としてわかる。昨日は明るかった時間に起きても今日はまだ薄暗いのである。そんな中で滞在の最終日を迎えた。最後の日にお礼の茶会を開き、



芸術祭の茶会



不時の夜咄

持参した茶碗と茶器で研究室の皆にお茶を点てた。その夜は現地で知り合ったロシア人研究者が指導教員の自宅に招かれており、私もご一緒させてもらうことになった。

夕食をごちそうになりながら、今日の茶会の話などをするうちに、ここでも茶会はできるのか？という話になった。茶道具はそのまま持ってきていた。お菓子の残りは研究室に置いてきたが、幸いお茶はまだたっぷり残っている。できそうである。では、やろう、ということになった。

せっかくなので趣向を考えた。フィンランドは世界中でロウソクの消費量が一番多い国である。どの家にも大量のロウソクとしやれた燭台が必ずある。ロウソクの明かりだけで茶会をやることになった。これを「夜咄」という。

そこまでやるならテーブルで立札だとちょっと物足りない。ほとんどのフィン

ランド人は自宅では靴を脱ぐので床は清潔である。念のためガラスのテーブルの脚を外して床に置き、真ん中にロウソクを立て、他の照明をすべて消して皆が周りに座つた。即席ながら（茶道では「不時」という）思いがけず印象深い茶会になった。この季節の日暮れは早い。フィンランドにはこれから長い冬と夜の季節が来る。

\*

茶は総合芸術である。抹茶やお菓子、懐石料理のみならず、焼き物や漆器などの器、掛け軸の書画、季節の花、焚かれている香、茶室や庭のしつらいなど様々な要素が茶事を形作る。どれ一つとして重要なものはないが、最も重要なのはおそらく客と亭主の対話である。茶事を構成するあらゆるものは、客と亭主、客と客との出会いの場、対話の場を提供するための舞台装置である。そのことは場所が世界のどこであろうと、どういう道具立てであろうと変わることはない。□

よこさわ こういち

1984年 北海道大学理学部卒業卒寮  
北海道大学大学院理学研究科修士課程を経  
て（株）日立製作所に入社  
在職中に北海道大学大学院工学研究科博士  
課程に社会人入学  
2007年 北海道大学医学部保健学科教授  
翌年 北海道大学大学院保健科学研究院教  
授（現職）

## バスケットボールの審判と会社人生

佐々木 美広

昨年パリ五輪で日本男子バスケは、予選でフランス完全ホームの中、後半残り数分でディフェンス河村勇輝がシュートブロックにいつたときにファールを取られ、相手フリースローが決まり日本の負けに繋がった。そのファールを吹いた女性審判は、ホームフランスの大支援の中、吹いた自分の笛さえ聞こえない会場で、かすかな触れ合いを止むに止まれぬように笛を鳴らしたように私には見えた。

これまで頑張って国際審判に成長してきた彼女のこの後の審判人生はどうなるのか、とも思った。たかがスポーツ、されど審判だったのか。日の丸を背負った全日本の河村は試合後、負けの責任は自分にあると大見栄をきった。

私はこの負けをにわかに信じられなかった。すでに試合は決していたのだ。ファールの判定の是非は誰にも覆せない（レビューの対象にもならない）。

私がたどり着いた審判の心得は、長年の経験則から次の3点だ。

★1 ルール（規則）、★2 リーズン（根拠・理性）、★3 リスペクト（尊敬）

だがこの審判に落とし穴が待っていた。それは情緒（エモーション）に負けたのだ。

審判を30年近く経験してきた私は、審

判の心理、状況判断、そして会場を二分するファンの気持ちが痛いほど分かる。それぐらい審判の世界（責務）は重くて広いのだ。

今まで「審判人生」について筆にしたことはなかったので、バスケの公認審判（判定心理、状況判断）までの道のり、そして会社人生との二足の草鞋について、どこまで言葉にできるのか、想いを巡らした。

### Zoom 談話会と東京一心会の2刀流

その前に、この記事を書いたいきさつを説明します。厳鷺寮誌の編纂委員会から一心会のZoom 談話会メンバーのよしみで、「バスケットボール（以下バスケ）の審判までの道のり」について原稿依頼があり、大変光栄なことでもあり、執筆をお

引き受けしました。

Zoom 談話会メンバーの一員になったのは東京一心会のつながり（寮時代同室の鈴木文明氏（S47卒）幹事）で、同メンバーの吉田春雄氏（S43卒）から、Zoom で句会を楽しんでいるとの紹介があり、この談話会に関心を持ったことが、私の物好きで無邪気な気持ちを奮い起させたのでした。

東京一心会には三菱養和会館で開催していたときから、愛知から参上していましたが、私が岡崎社会人バスケ連盟の役務をお引き受けしていたこともあり、2023年10月に4年ぶりに参加いたしました。

東京一心会の再開はコロナ禍が過ぎ去った時で、東京有楽町のとあるレストランでした。私は久しぶりに皆さんとの再会に胸躍らせて参加し、同窓生や新しい仲間との昔話に、寮時代にそれほど親しかったとは言えない方々と、楽しいひとときを味わいました。

今では東京メンバーとは少し異なりますが、全国区の一心会 Zoom 談話会には2か月に1回程度、年代の異なる諸先輩と古を振り返りながら、色々な話題をもちより、談論風発・ワイガヤ会を楽しんでいます。

## おいたち

奥羽山脈と北上山地に挟まれ、東北地方を南北に流れる北上川に沿って開けた

胆沢平野の要衝が奥州市です。1949年(S24年)に水沢市(現奥州市)で商売を営む6男の次男として生まれ、長男は跡取りとして、私は自由奔放で気ままな人生を歩むことを嘱望されたと思います。

水沢市は過去には緯度観測所長の木村栄(Z項の発見、出身地金沢)、政治家では「大風呂敷」の後藤新平、「2・26事件」の斎藤実、「シーボルト事件」の医学者の高野長英等の偉人、また日本の「重厚長大」企業の三菱重工の郷古潔らを輩出した地域でもあります。

幼少の頃はこのような歴史的な人物に関する知識もないまま、社会や国語の勉強もそっちのけで、理科や算数などのおもしろい知識に関心が行き、今になって大いに反省することとなっています。

高学年になり水沢小学校の校長室で掃除をしていた時、なにやら古びたA4横ぐらいの写真が額縁に掲揚されていました。前列に後藤新平と斎藤実を挟んで横に郷古潔、2列目後方に色黒いサングラスをかけた小柄の人がいました。

これが物心ついた時にはすでに亡くなっていた爺さんでした。実家の日本間で見たことがある写真と、同じものであることは気がつきませんでした。

爺さんは代々米問屋をしていたので、東京事務所などを通じて、水沢県人会で同郷の政治家らと繋がりをもっていたようです。その後日本経済は関東大震災、大恐慌でさんざんな憂き目を味わったと想

像されます。

世代は変わり、スポーツ界は隆盛を極め、今では奥州市（姉体町合併）出身の大リーグ選手大谷翔平が、野球界で数々の歴史的な記録を打ち立てました。シーズン中はテレビに釘づけでした。どこに行っても郷土の誇りとして、生まれ故郷や学校、出身地がマスメディアで取り沙汰されているのは素直な喜びです。

### バスケとの出会い

東水沢中学校（旧常盤中）に入ると母方の祖父母に預けられました。日本経済がどん底から立ち上がりはじめ、家の商売も多忙になってきました。中学に入学する前に体育館を覗きに行き、その時にバスケ部の選手が、あのボールをどうして小さなネットにいれるのか、放物線の不思議さとユニフォーム、バッシュ姿、その澁澁な光景に自分の姿を重ね合わせたのでした。ほかの部活には目もくれずすぐ入部しました。

明るいことばかりではありません。上級生の嫌がらせのようなスバルタ指導が私たちを待っていました。上級生を敬う挨拶、態度がなっていないとのようでした。

はじめのうちはドリブルもパスも小さな体育館ではできず、

体育館の周りをうさぎ飛びやイジヤリ、ランニングなどで体を鍛えました。北上川の河川敷まで時には5、6キロ走り、足腰を鍛えました。乾いた喉を潤すことも、床にお尻を付けて休むこともままならない世界がありました。この体力作りと精神力が今の自分を支える持久力の源になっていると自負しています。（笑い）

3年生になって隣村の江刺一中や姉体中に对外試合に出向きました。町村を跨いでの腕試しあれどもでした。勝っても負けてもチームワークとバスケスキルの未熟さを思い知らされました。

数少ない公式試合の勝負は噂とは違つ



中学時代のバスケ仲間。前列21番が筆者、右端は恩師  
旧常磐中学校の卒業アルバムより転載

て、隣村の南都田中に1回戦で敗れました。今でも心に残る中学最後の試合でした。もし勝っていたら自分のバスケ道はどうなっていたのだろうか。

中学の指導者は県南では名の通ったバスケの審判長でした。会社に入って公認審判を志したきっかけがこのあたりにあったのでしょうか。

### 高校男クラ時代

パンカラで有名な水沢高校では男女共学でしたが、女子禁制？の男クラスを3年間過ごしました。上級年は理数科クラスで暑苦しい、普段は窓を開け放した教室でした。有名な大学からやってきたと思われる新任教官の前でピリピリしながらも、面白い先生との気楽でふざけた授業をうけました。皆真面目な生徒なのに教師を馬鹿にしていたようにもみえました。

先生が黒板を向いているときに牛乳を飲んでいるヤツ、それを後ろから突つくヤツ、目の細いまじめな男が、物理の先生に「なにを寝ているんだ」と教科書で叩かれていたことなど、男クラの自由奔放な事件は思い出したらきりがありません。女子クラスとの遠足やフォークダンスなどを企画したり、今となっては忘れぬ思い出となっています。

科学部（化学班）に興味が沸き染料の実習を繰り返しました。手先がニコチン

で着色し喫煙を疑われたことも。体育系の部活をやらなかったのはなぜか…。大学受験を睨んで母親の教育熱に否応なく塾に通いました。今でも自分の性格の弱さに積年の後悔があります。

### 北の大地北海道へ

高校では色々な教科を勉強していたので総合大学を目指していましたが、担任の先生からは北大を薦められました。札幌で受験する予定であったが気象条件がよくなく、急遽函館で試験に臨んだ。慣れない旅程でかつ風邪気味で体調も良くなく、試験もうまくいかなかった。



北大入学式当日、両親とホテル前で

憔悴の中で函館の湯の川温泉をあとにした。次の学生浪人を覚悟していた。

あきらめかけた北大への入学が現実のものとなった。合格通知を受け取り、努力が報われたことを指導教官等が、家族ともども喜んでくれた。私は母親一辺倒の甘えの図式だったが、結核を引きずっといた父親がうれし涙を流してくれたよう見えた。

大学入学式の時の新入生歓迎式典では部活の強力な勧誘、両親とその中を潜った。構内の緑茂く中央道路は今でも新鮮な私の脳裏にやきついている。

また入学早々クラーク会館横に隣接していた洋風の2代目巖鷲寮で、県出身者の歓迎会が開催された。水高先輩の安部さん(S44)の誘いで参加したと記憶している。今まで食べたこともないジンギスカンを洒落た大広間で味わった。

皆酔いつぶれて静かになったとき、どうして床に新聞紙が敷き詰めてあるのかが分かった。「万物流転」の中でどうやって水沢高校出身の3人と、連絡を取って帰宅したのだろうか。いまでも不思議である。

親父の同級生で道府に勤める旧友の計らいで、藻岩山の麓で3年間の下宿生活を過ごした。隣の部屋には後に巖鷲寮の評議員となった斎藤瞭先生(酪農学園大)がおり同居した。山形出身の庄内寮によく連れて行ってくれた。若人なのになにも活動していないわたしを気遣って、札幌市内の混成合唱団に誘ってくれた。先生が酔っ払って帰ってきて、囲碁も教え

てくれた。

先生はサークルからすぐ退会したが、私は札幌の温かい人柄に誘われ、色々な経験をさせてもらった。音楽を嫌いだった私であったが、フォークソングやカラオケをいまでも地域の敬老会などで歌っている。不思議な縁である。

それでも同じ水沢の郷土出身で、イネの権威である高橋万衛門先生の教授室を訪ねたり、石川俊夫先生の社宅などを訪ねた。

3年間の下宿生活は大家さんの都合で卒業となったので、岩手県人にゆかりのある巖鷲寮に4年生のときに入寮することとなった。これが後生寮との深い縊となり今の私を育ってくれた礎石となった。

寮長(八戸高校の故工藤氏(S49))との面談をかろうじて通過し、寮の一員となった。南部藩も伊達藩も分らずによくも入寮できたものだと思う。同室に鈴木文明氏(S47年法卒)、別室には後に評議員となった千葉博正氏(S48年機械卒)があり、ダンスパーティーに誘ってくれたり、社交面での面倒をみてくれた。

あるとき寮母からは夕刻にドアを叩かれ、麻雀に誘われた。寮母部屋にいくと女性徒でもなければ社会人でもない、少し眩い人がいたこともある。藤女子短大か北星短大の?学生だったのかなあ。

次第に本来の勉学の場からずれはじめ、なぜか「社会勉強」に引きずられるようになった。それでも電気工学を専攻

していたおかげで、専門講座や実験・実習は履修しなければならなかつた。

学生紛争のさなか、卒業式を迎えることなく大学をあとにした。学生生活の本分は全うしたが、もっと高見の世界にモチベーションを保ち、将来もアントシアスでジェントルな素地を醸成しなければならなかつた。

今になって後戻りできない自分に忸怩たる思いです。

## 北から西の果て長崎へ

1972年は高度経済成長の最中で、就職環境は売り手市場でした。学生担当教官は高電圧工学の権威、坂本三郎さんでした。「どこでも行けるよ」と言って「君の行きたい企業は、」と聞かれ、「電気専門企業以外の総合企業を」と三菱重工が口から出た。この企業は造船、飛行機など、どんな分野の専門家や複合製品でも選択できるのでは?とあまり深く考えずに選んだ。

坂本教授は専門の立場から近くの「東北電力は?」とも薦めてくれたが、私の意思を尊重してくれた。まさか配属先は西の果て長崎までいくとは思ってもいなかつた。卒業論文が「自動機械（オートマトン）」を研究していたことが、造船設計部、艦艇設計課（武装係）に配属になったのはなかつたか。

日本の地理も全く無知で、故郷からも遠い長崎は本当に異国の地で、家族や近

親者、友達、皆から珍しがられた。入社前は実体のあまりわからない「護衛船団方式」の会社の良さを自他に言い聞かせた。

東北から遠く離れた寂しさを払いのけるように、新たな諸先輩や同窓生を仲間にして、むさ苦しい寮生活と九州のアウトドアを満喫した。

会社には歴然とした当時の社員、行員の格差社会があった。周りから一目おかれて、まだ新人育成期間中の社員を市民の人たちは暖かく迎え入れて、ゆくゆくは日本社会の中核を占めるエリートとして「甘く」育ってくれた。

私も多かれ少なかれ日の丸親方の恩恵に吹かれた。本当の社会の逆風は思いもよらずその後だった。

## 審判は楽しかった。だが…。

当時三菱重工長崎は女子バスケ部を強化、実業団のトップリーグ加盟を目指していた。部長だった先輩は私を長崎バスケ協会の一員に紹介してくれ、手始めにインターハイの常連だった鶴鳴女子高、純心女子高の練習試合を、初めは笛がならなかつたが吹いた。

県内の大会があるときは試合の準備を早くからやり、協会を構成する高校の試合の審判の副審を務めさせていただいた。土日の休日はアルバイト代りに汗を流し、全国大会を目指すバスケット選手のために、審判を通じて若き日の情熱を昇華した。

三菱重工のネームバリューのもとで、長崎人は親しみと温情的な接し方をしてくれた。



日本公認審判ワッペン

それもつかの間、4年半の設計部門の仕事は終焉を迎えた。1974年～1976年のオイルショックは造船不況を余儀なくし、入社した団塊の世代の人生を一変させた。私は勝手に自分を負け犬の人生だと自分に言い聞かせた。

私はこの地で、この会社で一緒に遊んだ諸先輩、同窓生らと続くであろう将来の夢を描いていた。

当時会社は戦後初めての対潜水艦ヘリ空母（艦名；はるな、排水量5200トン）を完工し、私は長崎湾に進水した「はるな」の勇姿を見届けた。前方に対戦ロケットランチャー、後方のフラットな甲板には対戦ヘリの着艦装置がみてとれた。

1976年頃から日本の防衛能力は増強され、対潜から対空に軸足を動かし始めた。造船所はミサイルを搭載した対空駆逐艦（艦名；たちかぜ）の艤装設計に着手していたが、私は間もなく1976年10月に三菱自動車岡崎に、有無を言わせず転

籍となつた。

大企業の合理も条理もない厳しさとおかけた宿命を味わつた。

## 0（ゼロ）からの自動車開発設計へ

その頃日本の自動車産業は欧米に追いつき、追い越せの号令のもと、官民挙げて自動車会社の育成に乗り出していた。

三菱自動車（重工の自動車部門）はもともとスクータやジープなどを手掛けていたが、三菱グループ、特に親会社の重工の子会社的扱いから資本の後押しを受け、クライスラーなどと技術提携し、当時はトヨタ、本田よりも大いに発展の土台はできていたのだった。その地は愛知県岡崎市にあった。すでに生産工場が立ち上がりついて、岡崎市は経済発展の遡上過程にあつた。



1987年度岡崎実業団功労章

重厚長大な船の設計0（ゼロ）から、1ミリ、1円単位の細かな設計や考え方のもと、マニュアルもスペックも不十分な設計部門に放り込まれた。ギャラン、シグマ、ラムダなどの開発は、他社の自動車を模倣することから始まった。それでもこれらの主力車は大いに人気があり、かなり販売された。国内には模範となる自動車会社はなく、部品会社、品質保証、サービス体制も確立されてはおらず、試行錯誤の生産開発体制が実状であった。

一方、土日の休みは三菱自工の名前で、愛知実業団バスケ連盟の役員として活動し、同時に日本実業団連盟（現Bリーグ、Wリーグなどの前身）の諸先輩等が、愛知の役員を快く受け入れてくれた。



1992年度県バスケ協会表彰

名古屋市を中心とした愛知県内には、経済発展と連動して企業スポーツを後押しし、主にトヨタグループやその関連企業、銀行、商社、重工、機械など、沢山のバスケットチームがすでに連盟入りしていた。私は会社の仕事をしながら、その合間をぬって審判に精をだした。

2足の草鞋を会社は許容してくれていたと今でも思っている。家庭は二の次になつて三行半（みくだりはん）一歩手前だった。

愛知協会、実業団連盟には、国際審判、公認審判の会社員や学校の先生等が所属し、その指導の下、私は公認資格を取得して審判はもとより大会運営、会場準備などに休日を費やした。

おかげで愛知県体育表彰（2004年度）、愛知協会表彰（1992年度）、岡崎実業団功劳章（1987年度）など授与され、現在は岡崎協会副会長、岡崎社会人連盟会長を承つている。

## おわりに

社会での修業と公認審判までの道のりは長い。アスリートで審判を目指す方たちは、「審判道は卒業した」などと思ってはいけない。なぜなら審判は人の一生と同じだからだ。

公認を取得するための特別の資格試験はないが、各県協会の定める講習会や実技を受講し、審判技術（ルール）の理解、普及・啓蒙、大会運営活動などを積極的に



2023年Wリーグ岡崎大会. オリンピック選手との記念撮影. 手提げ袋が筆者

体験するとよい。

あえて列挙すると、「＊ルールの理解、体力的な持久力、精神力と包容力；＊バスケ技術の理解、ルールの素早い適応、判断力；＊公正で毅然たる態度、選手・指導者、観客の本心と感性の理解」など。

今は岡崎市の社会人連盟の大会運営に携わることで、スポーツ関係の行政や異業種のバスケ仲間との親交を育んでいる。毎年Bリーグ、Wリーグの大会など岡崎市に誘致し、昨年度は女子トヨタ自動車

対デンソーの試合を開催（ゲームデレクター；競技統括担当として）し、大盛況で観客は大いに盛り上がった（2日間の入場者数約9000人）。幸いにもオリンピック選手との記念撮影の恩恵に浴した。

アマチュアのアスリートの世界に身を置くことで、かつて学生寮や会社独身寮で体験した社会生活が今の人間形成に一役かっているような日々を過ごしている。いまでも当時の諸先輩や審判仲間と永く交流している。△

ささき よしひろ



1972年 北海道大学工学部電気卒、三菱重工長崎造船所入社

1976年 三菱自動車乗用車開発本部に転籍、管理本部、知的財産部

2014年 退職。2024年現在、岡崎バスケット協会副会長、岡崎社会人  
バスケット連盟会長

〔近況〕65歳で会社をリタイアし、長い間奉仕してきた市内のスポーツ団体役員（会長）も10年を経過しました。最近はバスケOBとのゴルフや、最寄りの敬老会で高齢者の方たちと、囲碁、麻雀、時にはカラオケを楽しんでいます。今まで山谷のあった方たちに寄り添い、日々上り路といい聞かせ、目線を高見の景色に向けて生きています。これが北大の意思に叶うものと自己に言い聞かせながら。

## 私の宮澤賢治

猪狩 昌和

一人のケンジニアンとして——私は郷土の先輩、石川啄木や宮沢賢治の大ファンでした。とりわけ郷土盛岡を離れてから一層、啄木の歌や賢治の詩や童話に寄せる想いが大きくなつた。1960 年代の後半から 2000 年まで、大学の国文学を専攻する学生の「卒論」や「ゼミナール」の作家論で最も人気のあった作家は夏目漱石でもなく芥川龍之介でもなく宮澤賢治でした。それだけ賢治の詩や童話がもたらす多様性や賢治の生き様が当時の多くの学生に感動と影響を与えたものでした。

私は大学生のころ、当時出版された『宮澤賢治全集』(全 12 卷・別冊 草野新平編・筑摩書房)を一冊ずつ買い求め、賢治作品を読み始めたのがきっかけで、その後数多の賢治作品の研究書や宮澤賢治の論評書を買い求めては読んでいました。

70 歳を過ぎて、そろそろ終活をとおもい、宮澤賢治の蔵書を整理してみたら「校本宮澤賢治全集(全 14 卷・1977 年版)」「新校本宮澤賢治全集(全 16 卷・1999 年版)」はじめ書名数で 143 点、200 冊を超えていました。

前理事長の小笠原先生から巖鷲寮への寄贈のお話を受けた時には、既に、ある賢治ファンの団体に一括して寄贈した後で、私自身悔やんでいる所でした。先生より

「それなら賢治について一筆を」というご下命があり、喜寿を迎えた私自身の賢治への想いを「思い出」として本稿を綴つてみた次第です。

私自身は賢治の研究者でもなく、一人のケンジニアンでした(当時、経済学者のケインズ主義者の呼称をもじって賢治ファンをこう呼んでいました)。その私が賢治作品を、どう受け止めていたか、お読み取りいただければとおもいます。

(ここで取り上げた賢治作品の内容は紙数との関係で省略しますが直接作品に触れて頂ければと思います)

### 「イギリス海岸」の歌

振り返ってみて、私と宮澤賢治との出

会いは中学生の時でした。

作家の堺屋太一氏に「団塊の世代」と云われた戦後最大のベビーブーム生まれで、1959年（昭和34年）盛岡市立上田中学校に入学しました。教室が足りなく、入学してしばらくは体育館を仕切って教室にしていました。2年生の時に生徒会の執行部をしていた関係で「リーダーシップ研修会」という学校に寝泊まりした研修会がありました。今では考えられないことですが、体育館でのキャンドルサービスや校庭でのキャンプファイヤーなどがあり、賢治の「星めぐりの歌」や「イギリス海岸」などを歌った。理科の教師で渡辺正治先生や内川吉男先生（詩人としても有名であった）から、宮沢賢治の詩や歌の指導をして頂いた。

“Tertiary the younger tertiary the younger tertiary the younger mud-stone……” いまでも歌詞とメロディが浮かびます。

また、賢治の詩集「春と修羅」の中の「永訣の朝」の朗読を全校放送で、聴いていた記憶が残っています。

高校時代は、ほとんど運動部の部活と受験勉強の記憶しかありませんが、1年生と3年生の時の担任であった国語の梅原廉先生（退職後、花巻市の新渡戸稻造記念館の館長を務められた）の授業で、多分1年生の時の授業であったと思うのですが、賢治の詩集『春と修羅』の中の「岩手山」という四行詩を取り上げた先生の授業を

今でも覚えています。

「そらの散乱反射のなかに 古ぼけて黒くえぐるもの ひかりの微塵系列の底にきたなくしろく澱むもの」

上二行は仰ぎ見た岩手山を下二行は山頂から俯瞰した景色を「そらの散乱反射の中に」「ひかりの微塵系列の底に」、賢治の愛した岩手山は黒くえぐるものであり、きたなくしろく澱むものであった。当時の受験生にはフィットするものでした。

### 詩集「春と修羅」から小岩井農場

私が宮澤賢治の作品に感動し本格的に読み始めたのは北海道大学に入学してまもなくでした。筑摩書房から出版された草野新平編の『宮澤賢治全集』（全12巻・別冊）を購入し、教養部時代の1年半をかけて、読み込んだものでした。

詩集『春と修羅』の中に「小岩井農場」というパート1から9（5・6・8が欠落している）までの、パート1だけでも110行にもなる長文の自由詩があります。

この詩を読み込むと、「ボキャブラリー（語彙）」の多さに驚き、気象学や地質学、土壤学、または仏教の教えなどに基づく、語彙や知識の表現、ドイツ語や日本語訳に逆に英語でルビを付ける、左下がりになつたり、右肩上がりになつたりする行列など、自由奔放とも思える作詩や表現の独創性。その魅惑にすっかりとりこになってしまった。（おそらく賢治作品にはじめて接した時に、このような感想を持たれた

方が多いのではないかと思います)

私にとって「小岩井農場」は幼いころからよく遊びに行っていたところでした。中学生のころからは自転車で橋場線（現田沢湖線）の沿線を小岩井農場までサイクリングし、栗拾いやアケビ採りに行っていました。盛岡駅から橋場線の汽車に乗り、小岩井駅で下車し、歩いて小岩井農場の本部へ向かう。パート1からパート3までは春の兆しの中、駅から農場本部迄の歩いている賢治の心象風景である。「鶯どももごろごろごろごろ鳴いている」「ひばり ひばり（中略）そらでやるブラウン運動」などなど、駅から降りて本部迄一小時間歩いた記憶と併せながら読み進んだものです。パート4でロビンソン風力計のある「気取った本部の建物」がでてきます。そのままの景色が記憶としてよみ返ります。

賢治に “der heilige punkt”（デア ハイリゲ プンクト・聖なる場所）と云わせた「小岩井農場」は自らの体験を思い起こさせてくれる懐かしさと共に、賢治の魅力に惚れ込むきっかけを作ってくれた作品でした。

### 「農民芸術概論綱要」

1925年（大正15年）賢治30歳、この年賢治が教鞭を執る花巻農業学校の中に開設された岩手県国民高等学校の講師を兼任し農業科学や芸術概論を講義した。

「農民芸術概論綱要」はこの時期に起稿

され、講義されたものです。

賢治はこの年の3月に花巻農学校を依頼退職し8月に「羅須地人協会」を設立し、農村青年や篤農家に講義している。

当時、冷害と汗して働いても豊かにならない小作農民の生活向上を願い、賢治は次世代を担う農村青年に希望を託し、「羅須地人協会」を通してその育成と肥料相談や稻作指導を進めていました。

この「綱要」は「われらはみな農民である。ずいぶん忙しく仕事もつらい もつと明るく生き生きと生活をする道を見つけたい（中略）世界がぜんたい幸福にならぬいうちは個人の幸福はあり得ない・・・」（序論の冒頭部分）という賢治のアジテーションから始まります。

私自身協同組合の仕事に携わり、賢治の「羅須地人協会」の活動に大変興味をもっていました。賢治の蔵書の中にはドイツの「信用組合」を指導したラスキンやイギリスの「ロッチデール消費組合」を理論的にも指導したロバート・オウエンや日本の民芸運動に影響を与えたウィリアム・モリス等の著作がありました。

賢治は当時の「産業組合（現在の農協）」に関心を持ち、寄付までして支援していましたが、自ら関わることなく「羅須地人協会」を設立し「イーハトーブ」というユートピアを創造しようと活動をしていました。

また、この時期には、母校の盛岡中学校校友会誌に「生徒諸君に寄せる」を発表し

次世代の青年に「新たな時代のコペルニクスやマルクス、ダーウィン」の出現を呼びかけています。

### 「グスコープドリの伝記」と「雨ニモマケズ」(晩年の宮澤賢治)

賢治は33歳の8月「肋膜炎」で病臥する。36歳の2月から病気も快癒に向かい「東北碎石工場の技師」として、生き生きと仕事する。この年の11月3日付け手帳に「雨ニモマケズ」を記す。翌年の3月「児童文学」第2号に童話「グスコープドリの伝記」を発表する。そして翌年(1933年・昭和8年)9月21日賢治は38年間の生涯を閉じています。

「グスコープドリの伝記」は主人公のドリが人工的に火山を噴火させ、噴火ガスによる温室効果で冷害に悩む農民を救済するという童話である。また、の中には火山の噴火に人為的な降雨を起こし肥料を散布したり、海面の変動を起こし潮汐発電所(ちょうせき発電・潮力発電ともいう)をつくるなど、自然エネルギーの活用が物語の中にでてくる。賢治はこの作品を死の前年に発表している。

私はこの作品の中に賢治が求めた姿を投影しているのではないかと思うのです。確信的に言えないのは賢治自身自己犠牲による救済を「そうありたい」と思えども「よし」としたわけではないと思うからです。

併せてこの作品がもたらす賢治の先見

性に驚きを禁じ得ません。たとえばこの童話の一節に、(ドリ)「先生、気層の中に炭酸瓦斯が増えてくれば暖かくなるのですか。」(クーポー博士)「それはなるだろう。地球が出来てから今までの気温は、大抵空気中の炭酸瓦斯の量できまっていたと云われる位だからね」という会話が出てきます。今日の「温室効果ガス」による気候変動や、火山のエネルギーを利用した「地熱発電」や潮位の変化による「潮汐(潮力)発電」など、自然エネルギーの活用についても予見しています。

「雨ニモマケズ」は「雨ニモマケズ 風ニモマケヌ (中略) ソウイウモノニ私ハナリタイ」という、私たちの年代では誰でも口ずさむことのできるほど有名な詩であります。

賢治は肺の病の中で、快癒しつつあつたこの時期、東北碎石工場の技師として活躍(仕事)の場を持ち、石灰岩をどのくらいの粒度(碎石)にすれば施肥の効果が高いか、その技術指導のかたわら、酸性土壤を改良する肥料として碎石石灰岩を「炭酸石灰(タンカル)」と自ら命名し、農業試験場にその効果を推奨させ、セールスとして近隣農村や農業組合を駆け回っていました。本人も盛岡高等農林学校で学んだ「土壤学」や「地質学」「鉱物学」などの専門領域を生かすことが出来て、かつ農民の生活向上に結び付くこの仕事に生きがいを感じていた。しかしそれも長くは続かず病が体力を奪い、生きがい

迄奪い去ろうとしていた。

その時期に「雨ニモマケズ」は毎日持ち歩いていた手帳に書き記されたものです。

私は賢治自身「ソウイウモノニ私ハナリタイ」という想いを正直に率直に書き記したものと受け止めたい。

反面、「ソウイウモノニ私ハナレナカッタ」、病床にあった賢治が「ふと漏らした敗北宣言」ではないかという受け止めも出来ます。この事は賢治研究者の間にも両論があり、「雨ニモマケズ」論争というものがありました。

冷害と働く生活が豊かにならない小作農民を前に、なかなか、思うような農事指導も受け入れられず、自らは喰うに困らず、資産家の息子という、その出自への負い目みたいなものを持っていたことも反映していたのかも知れません。

#### おわりに（人間宮澤賢治）

これまで、私自身が賢治作品をどう捉えてきたかを述べてきましたが「喜寿を迎えた私自身が賢治をどう捉えているのか」率直な感想を述べてまとめとします。

宮澤賢治は私にとって、偉大なる先輩であり、教師であり、最も尊敬する作家であります。中学時代の生徒会執行部の活動や灰色の受験生活の中で、故郷を離れた大学の寮生活の中で、協同組合の活動を仕事として選択し活動（仕事）をしていました時に、そして今まで賢治作品にどん

なに感化され、励ましを受け、愛しんできたことか！77歳になった今日も持つ率直な感想です。

これまで、数多くの賢治研究書や賢治作品の解説書、「賢治論」を読んできました。その中で気付いたことは、「賢治の作品の解説（解釈）書」があまりにも多いことです。「語彙を解説する辞典」のような本まで出版されています。この事に私は辟易としていました。

賢治自身、自らの作品を”mental sketch modified”（心象スケッチ）と云い、「そのとほりの心象スケッチです」（『春と修羅』第一集 序より）と述べている通り、賢治自身の心に浮かんだまま（心象）をスケッチしたものと述べています。賢治は作品の語彙や表現や固有名詞など、読み手に理解してもらおうとして書いたわけではなく、「自らの心の中に浮かんだものを表現したものですよ」といつている。肝心なのは「読み手がどんな感想を持つか、どんな受け止め方をするのか」ということが大切なですよ」と言っているようにも受け止められます。

私はどんな賢治の研究書や解説書を読むよりも、賢治作品に直接触れて、読み手がどんな感想や受け止め方をしたのか、の方がもっと大切なことと思うのです。「語彙を解説する辞典」のような本などは破棄して、分からなければ自らの感性を大切にしよう！ということです。

「ペルメムとユリア」という店名の喫

茶店があります。詩集『春と修羅』(第一集)の「小岩井農場」の中出てくる人物です。賢治作品を知らない人は、この店名を聴いただけでは何のお店か分からぬ。この店名を見たお客様に「どう受け止めたのかお任せします」と。私はこの店主こそ本当のケンジニアントと思うのです。

もう一つの気づきは、賢治を熱心な仏教徒、聖人君子、偉大な教師などと神格化する見方です。確かに賢治作品の中に、当時のタイタニック号の事件を知っていた賢治は子供や乗客の救命を優先して自らは犠牲になった神父のことがカムパネルラとして「銀河鉄道の夜」に出て来ます。自己犠牲の上に他者を救済する童話も多く書いてきました。他者から見れば賢治自身もそのような生き方をしてきたように見えます。

しかし賢治自身は「いかりのにがさまた青さ 四月の気層のひかりの底を 唾し はぎしりゆききする おれはひとりの修羅なのだ」(『春と修羅』の一節)と自らを「修羅」と云っています。「修羅」とは仏教でいう六道「天・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄」の中で「人間」以下の「道」を指す。賢治は自らを「人間」以下の「修羅」と言っているのです。

「賢治は何故結婚しなかったのか」「賢治は何故浮世絵を収集していたのか」「高等農林学校時代の後輩保坂嘉内への接し方は恋愛感情を超えるものであったのではないか」「妹トシへの感情は」など人間

宮澤賢治、赤裸々な賢治はどこ行ったと思うことです。

### 賢治の妹トシが残した日記「自省録」について

最後に 2000 年代に入ってからの賢治研究で注目されている、賢治の妹トシが残した日記「自省録」について触れてみたい。

賢治の 2 歳年下の妹トシは賢治作品に多大な影響を与えてきた。最愛の妹の臨終の模様は「永訣の朝」に描写され、「無声慟哭」やその後に続く「オホーツク挽歌」などの挽歌群や童話「銀河鉄道の夜」など、トシへの追悼作品が続く。この妹トシが「自省録」という日記を残していた。この事が公表されたのはトシの末妹クニの子(賢治の甥)宮沢淳郎が書いた『伯父は宮澤賢治』(1989 年・絶版となっている)です。

トシが花巻高等女学校時代音楽の教師との「恋愛」が「事件」として地元のマスコミに揶揄され、故郷を逃れるように東京の日本女子大学に入学する。大学では創立者成瀬仁蔵の訓導を受け、卒業と同時に母校花巻高等女学校の教諭になる。その前に自分の来歴を振り返って「自省録」を作成する。郷土を離れざるを得なかった「恋愛事件」を冷静に受け止め、大学の創立者でありクリスチャンであった成瀬仁蔵の「単一の宗教、宗派」を超えた「宗教観」「宇宙の意思」に共鳴していく過程を綴っている。

日蓮宗という特定宗教に帰属する信仰が強かった賢治は、妹トシを通して「宗教の根底で通じ合う価値観」や「宇宙意思」といった成瀬仁蔵の宗教観に影響を受け共鳴していったと思われます。そのことはトシの死後発表された「銀河鉄道の夜」や「農民芸術概論綱要」などに表れていると云われています。

このトシの「自省録」はトシの病床にあって看病していた賢治は目にしていたと思われます。(目にしていたという研究者もおられます)。この「自省録」は宮澤家の分家の甥御さんから公表されました。宮澤家にとって公表したくないものだったのかもしれません。それだけにこれまでの賢治研究を覆すような内容も多く含まれています。(例えば「銀河鉄道の夜」のカムパネルラは妹トシという説は疑問符が

つきます。)

せめて 1970 年代に公表されていればどれだけ無駄な賢治研究が省けたのではないかと思わざるを得ません。

また賢治の晩年、病臥の中で何度も校正した「文語定型詩」の一節から繙いた『修羅を生きた詩人 宮澤賢治の真実』(今野 勉著 2017 年新潮社・2000 年新潮文庫)という、これまでの宮澤賢治像を覆すような、人間宮澤賢治を追求した本も出版されています。

まさに「宮澤賢治 未だに死なず」アニメの世界でも息づいています。

拙稿をお読みいただいた後輩のみなさんへ、人間宮澤賢治の魅力に是非触れて頂きたいと思います。 ↪

(2024 年 10 月 23 日 記)



いかり まさかず

1970 年北海道大学工学部機械工学第二学科卒業卒寮

北海道大学生活協同組合の学生理事を務めていた経緯から、  
専攻とは異なる産声をあげたばかりの市民生協（現コープさっぽろ）に  
就職、「生活協同組合」の仕事に闇り、  
2012 年日本生活協同組合連合会の関連会社を退職

## 小川博三先生の思い出

関口 信一郎

小川博三先生は、我が国における交通計画学、都市計画学の創始者の一人に数えられ、その研究は交通計画、地域計画、日本土木史、日本土木地理に及ぶ。また、権威ある第11回短歌研究賞を受賞した優れた歌人としても知られる。その前半生は若き日に抱いた大陸に生涯を埋める志に貫かれ、敗戦で帰国した後半生は一時事業を営むもそれを辞めて学究生活に入り、その学識を通じて北海道の発展に尽くすと同時に、交通計画をはじめ土木工学に新たな分野を拓いていく生涯であった。

筆者が小川先生に接したのは先生の最晩年の3年間でしかない。それに加えて筆者の専門は港湾工学であり、先生の御専門について述べるだけの学識も情報も持ち合わせてはいない。その点、読者の寛恕を請う次第である。

### 先生の生涯と業績

先生は1913(大正2)年10月3日、岩手県盛岡市長町に父隆章、母モトの長男として誕生した。1931(昭和6)年岩手県立盛岡中学校を卒業し、北海道帝国大学予科工類に入学。同年9月に満州事変が勃発すると、大陸に生涯を埋める決意を固め、1934(昭和9)年に工学部土木工学科に入学した。その前年には建国直後の

満州および朝鮮に、また翌年には実習を兼ね満州東北の奥地に旅行している。1937(昭和12)年、南満州鉄道株式会社に入社した。1943(昭和18)年、現職のまま大東亜省嘱託として東南アジア諸国の交通実態調査を命じられ、1945(昭和20)年には仏領印度支那土木総局事務管掌補佐(旧建設省事務次官に相当)を命じられた。翌年帰国し盛岡に交通調査業務を目的とする交通調査事務所・東北建設事務所を興すが、1949(昭和24)年には一切の事業を辞め総合開発の研究を始め、岩手大学盛岡工業専門学校講師となる。1956(昭和31)年に東北大学理学部へ『地域計画における交通の機能論的研究』を主論文とする学位申請論文を提出し、理学博士

(地理学) の学位を授与された。この交通に関する地理学的研究においては、旅客交通が目的地の魅力によって惹起され、交通に要する時間によって阻まれる関係は交通理論式 P/M 曲線で表すことが出来ることを示した。そこ至る経緯について小川先生は論文『グラビティ・モデルの発想とその展開』において次のように述べている。

「(P/M 曲線) の発想は筆者が昭和 12 年～18 年満鉄社員として、在職中しばしば日本に帰り、日本の交通状態を満州のそれに比較することによって自然発的に得た。その後敗戦を経て帰国し、現実の数字を分析することによって、昭和 29 年頃ようやくまとめの糸口を得たものであつた。」

交通量計算については、ジョン・スチュアートが発表し、のちにワルター・アイサードが交通量計算に利用して世界に広がったグラビティ・モデルが有名である。小川先生はそのことに触れ「当時筆者はスチュアートを知らず、またアイサードの発表も筆者より 5～6 年遅れている。誠に偶然の一一致を喜ばずにはいられない。」と述べている。

先生は学生たちに「自分は中年になってから学者の道に入ったので、昼食は南部せんべいにバターを塗って食べながら時間を惜しんで研究を続けた」と話すことがあった。その勤勉な研究姿勢は生涯変わることがなかつたと思われる原因是、

36 歳から 61 歳までの 27 年間の研究生生活で発表した幅広い論文や刊行した著作、そして『蒼きふるさと』などの歌集からも推察できる。

1960 (昭和 35) 年に岩手大学工学部教授、1964 (昭和 39) 年には北海道大学教授となり、翌年土木工学科に新設された交通計画学講座を担当することになった。以後、『交通計画』『都市計画』(1966 年)、『記念碑都市』(1970 年)、発病後の 1975 (昭和 50) 年には『日本土木史概説』、『日本の土木地理』(共著) を刊行している。専門の交通計画だけでなく都市論、都市計画、地域計画、土木史など幅広く研究対象にできたのは、先生が土木工学についての独自の視座を持って不断の努力を積み重ねていたからに他ならない。

また、先生は国、北海道、札幌市、国鉄などの審議会、評議会、専門委員会等の委員や委員長としても活躍された。特に長年の懸案となっていた北海道の大動脈JR 函館本線の新琴似通り・苗穂駅間を高架にして踏切を無くし、円滑な道路交通の確保と市街地の発展を図り北海道の中核都市にふさわしい札幌の街に造り変えるうえで、関係各機関の調整に尽力された功績は極めて大きいと専門家の方からお聞きした。

当時、青函トンネルの建設中であったが、新しい札幌駅には将来に備え新幹線用のホームが計画されていた。1974 年には科学技術上の優れた発明、研究等を行

い、北海道の経済社会の発展振興等に功績があった人々に贈られる北海道科学技術賞を受賞された。

先生が交通計画だけでなく幅広い分野で活躍されたのは、土木工学に対する理解が深かったからに相違ない。地球上で人間が常に居住し、経済活動を営み、また規則的な交通を行っている空間は「エクメネ」と呼ばれている。先生はエクメネを造るのは生物としての必然的営みであり、土木工学こそは人間の生活と生産のための工学であり、一切の人間の営みの基盤をつくるための工学であると規定した。

そのうえで、「農業・林業・水産業・鉱業・工業・交通・運輸・情報など人間の一切の営みの基盤にあり、祭祀に、政治に、軍事に、経済に、あるいは実用として、あるいは象徴として構築物を築いてゆく土木は、いわば文化的立場から観察され記述されなければならない」と述べている。

さらに土木史を著す意義と目的について、「土木に関する限り詳細な史料に比べて史観によって貫かれた土木史は少なかった。このことは人間の地上における営みを正当に理解しようとする者にとってははなはだ不便である。(中略) 歴史は先人の業績をたずねて自らの進路を悟るためにある」「土木史を学ぶ意義は、(中略) 人間がその住む地上において如何にしてエクメネを拡大し、地域を構成し、これを経営していったかを理解するためにある。そこには人間の知恵が働き、人間の生み出

した一切の技術が働き、次第に集大成されて学問として形成されていったその流れを把握するにある」と語っている。

以上述べたように、エクメネを形成する人間の必然的営為としての土木工学という視座から、独特的の都市論、地域論、ヨーロッパ都市の中で歴史の発展に記念碑的役割を果たした都市の本質を体系化した『記念碑都市』、『日本土木史概説』を次々に世に出した。



1978年に出版された『記念碑都市』の表紙

## 先生の思い出

学部の3年に入って小川先生の講義を聞き始めた頃だったと記憶しているが、講義中に度々「偉くなれ」と学生達に言われることがあった。筆者は若気の至りもあり、教育者としては「偉くなれ」ではな

く「立派な人間になれ」というべきではないかと思い、ある日の夕刻に先生の官舎に伺ったことがあった。挨拶が終わって早々、不躾にも「先生、偉くなれといつも言われますが、違うと思います」と話したところ、「君は悔しくないのか！」と自慢の髭が飛び出すような勢いで先生の言葉が返ってきた。間髪入れず奥様が「関口さん、果物でも召し上がり」と先生の爆発寸前の感情をそいでいたいたのでその場はおさまったが、その後何を話したかは記憶がない。先生も困ったやつが来たと思ったに違いない。

先生は「目標を早く決めて準備しなさい」と常々学生に話し、時間厳守と連帯責任を助教授以下研究室の全員に厳命していた。筆者は連帯責任ではなく自己責任こそ徹底させるべきではないかと考えていたので、ある日、研究室の全員が先生の部屋に集まる時刻に故意に遅れたことがあった。覚悟を決めて先生の部屋に向かっていると、先生の部屋から研究室の全員が硬い表情で引き上げて來ると廊下ですれ違った。彼らの冷たい目線を感じながら先生の部屋をノックして入ると、先生は机に向かったまま「次から気を付けるように」と言われただけだった。

先生に最後にお会いしたのは逝去される前年の秋、入院先の北大病院の一室であった。果物と知人から届けるように頼まれた白金パプラールという薬を持参すると、「関口君、この薬効くのかね」とや

や不満そうな表情で聞いたら、「先生、野口英世が作った薬ですよ」と答えるとそれ以上は聞き返さなかった。部屋を出るときに「関口君、学生は果物なんか持つてこなくていいんだよ」と学生の懐事情を察して優しい言葉をかけられた。その年の12月、先生は最後まで生きる望みをもって「蒼きふるさと」盛岡に向かった。

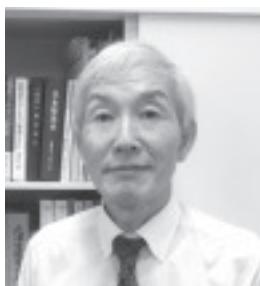
臨終に際して先生は、皆様への言葉として「自分は常に死ということを前提にして物事を考えて來た。この点、悔ゆるところはない」と言い残したという。

## むすびに

札幌の顔ともいいくべき札幌駅の周辺では北海道新幹線の建設が進んでいる。しかし、ここに至るまでに幾度も岐路に立たされてきた。筆者が鮮明に記憶しているのは、東北新幹線の盛岡以北青森までの整備方式について 1992(平成4)年に日本経済新聞に掲載された中村英夫東大教授と佐藤馨一北大助教授(1967年本寮卒寮・編集部注)の論争である。中村教授が新幹線整備の財源確保を優先し、いわゆるミニ新幹線方式(在来線の外側にもう一本レールを敷き、軌道の間隔を標準規にして新幹線を直通させる方式。在来線の線形なので特急以上のスピードは出せない)を主張したのに対し、佐藤助教授はJR株の売却収入により整備の財源は確保できるとして盛岡・青森間だけでなく国土幹線軸となる札幌までフル規格でなければならな

いと論陣を張った。その後、東北新幹線はフル規格で整備されたが、北海道新幹線についてもほとんどミニ新幹線に傾いた時期があった。その時にも、鉄道高架に際して将来の新幹線乗り入れを想定した札幌駅の計画決定に尽力した小川先生の遺

志を受け継ぐように、北大交通計画講座は一貫して新幹線のフル規格を主張した。現在、小川先生が基礎を築いた交通計画講座はその伝統を受け継ぎ、調査研究と社会活動を通して北海道の発展に貢献している。 ↪



せきぐち しんいちろう

1976年北海道大学大学院工学研究科修了、北海道開発局を退職し、現在（一社）寒地港湾空港技術センター特別調査役。博士（工学）。

著書に「シビルエンジニア廣井勇の人と業績」（北海学園北東アジア研究交流センター）「北海道みなどまちの歴史—廣井勇が育んだ北の日本近代築港」「世界港湾史—世界の港と水運ネットワークの発達史」（以上、亞璃西社）など。

❖ 編集者による追記—小川博三と巖鷲寮： 小川博三が巖鷲寮生であったことはないが、北大在学中も北大教授として赴任してから寮とは関係が深く、多くの寮生および寮関係者が先生の聲咳に接している。満洲・仏印（現ベトナム）から帰国後の1953年（昭和28年）に本寮の『芳名録』に、歌人としての小川は、以下のような手書きの誌を書き残している。おそらくその時に寮に逗留されたのだろう。くわしくは、2014年度『巖鷲寮誌』の14-17頁の記事を参照。

#### 狸小路にて

今宵ハ淡き雪降りて	我やむかしの我ならず	敗れし国のパチンコや
ペーパメントを湿らしめ		角帽あまたむらがりし
昔学びし町にきて	文学の事たゞしました	故国は散じ時はさり
映画を見むと思ひしや	アジアの事をあげつらひ	旅人われに雨にぬる
	巷を君とゆきたりし	
ショウウインドウ赤き花	思い出ありて佇みぬ	
光をぬうてゆきかよう		
をとめの群の多けれど		

## 佐藤、新渡戸が信じたキリスト教

小澤 和男

私は1993年にキリスト者となり、2000年には会社を辞して神学校で学び、今は牧師という立場で教会の働きに携わっている。それゆえ、キリスト者である佐藤、新渡戸が寮の名に冠せられると知ったときは、なにか誇らしい思いがしたことを覚えている。

今回、機会をいただいたので、クラークの「イエスを信する者の契約」を手がかりにしながら佐藤昌介、新渡戸稻造らが受け入れたキリスト教とはどのようなものであったのか、なぜ彼らは信じるに至ったのか、そして私はどのようにしてキリスト者となったのか、この3つについて書いてみようと思う。

### 「イエスを信する者の契約」

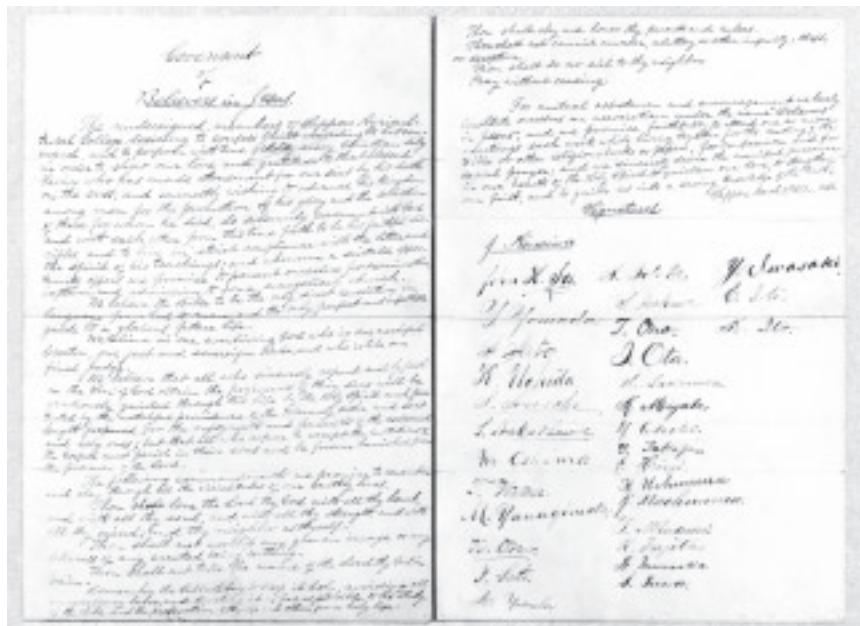
1877年3月、クラークが任期を終えて帰国するにあたり「イエスを信する者の契約」（Covenant of Believers in Jesus 以下「契約」）を記し、信仰に入る者たちの署名を求めたとき、これに佐藤、大島正健を含む札幌農学校の一期生全員が署名し、後に

二期生として入ってきた新渡戸（旧姓太田）、内村鑑三らも続いた。そのときの様子は大島や内村の著書に詳しい。

現在この「契約」のオリジナルは札幌独立キリスト教会に所蔵されているが、資料の痛みを防ぐために原則非公開となっ



札幌独立キリスト教会



イエスを信ずる者の契約〈札幌独立キリスト教会の許可を得て掲載〉

ている。ところが今回、関係者の特別な配慮をいただき、思いがけなく閲覧の栄に浴することができた（上の写真）。間近に観察するとインクはやや褪色しているとは言え、S. Sato（佐藤昌介）、I. Ota（太田稱造）の流麗な筆跡を見ることができる。

クラークとアメリカキリスト教会史

さて、クラークが宣教師でもなければ神学者でもない一介の平信徒に過ぎなかったのにもかかわらず、学生たちに聖書を配り、「契約」へのサインを迫るほど情熱的な宣教を行い、多大な感化を与えたことは一見不可解なことにも思えるが、アメリカの近代キリスト教会中にその謎

を解くヒントがあるように思う。

ルターとともに宗教改革の大きな働きを担ったスイスのカルヴァンが「キリスト教綱要」を記し、その影響がヨーロッパ大陸から英國にも及ぶと、トマス・カートライトは英國国教会（アングリカン）に對して改革の反旗を翻す。この運動の中から誕生したのがピューリタン（清教徒）と呼ばれる人たちである。しかしアメリカン側からの徹底的な弾圧が加えられしていくと、ピューリタンは「わたし（神）の示す地に行きなさい」と語られたアブラハムに自らの姿を重ねるようにして、自由な信仰の場を求めて次第に海外への脱出を考えるようになり、1620年、ピル

グリム・ファーザーズと呼ばれる一団がメイフラワー号に乗ってマサチューセッツ州プリマスに渡る。このようにして、ピューリタン信仰はニューイングランドに移植されていった。

やがて1800年代になり、アメリカ政府が中国を含む東アジア地域に向けた膨張政策をとるようになると、それと並行するようにニューイングランドでは海外宣教の機運が高まり、聖書配布事業団体であるアメリカ聖書協会や、アメリカ最初の海外伝道団体であるアメリカン・ボードがマサチューセッツ州に設立され、この時期に多くの宣教師を海外に送り出していく。クラークは、このような宣教の熱

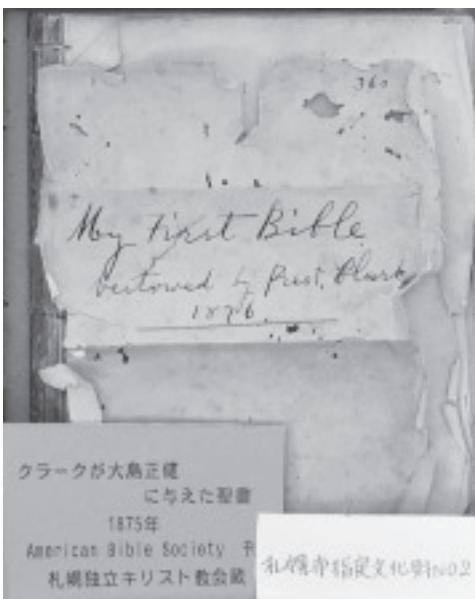
意が盛んであった時期にマサチューセッツ州のピューリタン会衆派の教会で信仰を養われ、アメリカ聖書協会発行の英語聖書をたずさえて札幌にやって来たのである（下の写真）。

札幌農学校の第一期生たちは二部屋の寄宿舎生活を送り、授業に先立ってクラークから毎日聖書の講義を受け、聖書や賛美歌を暗唱させられ、日曜日には「礼拝まがいの集会」（大島）がもたれた。私が学んだ神学校（聖書神学舎）や、いま教えている北海道聖書学院では、学生たちが寮生活をしながら毎日聖書を学び礼拝するだけでなく、教師と学生たちの人格的な交わりをとおして信仰が深められて

いくことを大切にしている。札幌農学校と神学校、いかにも性格の異なる教育の場であるはずなのだが、両者を比べると、クラークは明治初期の官立学校を（結果的に）神学校とし、第一期生たちは（はからずも）神学校で学ぶ神学生になった、と私には思えてくるのである。このようにして、ピューリタン信仰はクラークの手によって新たに札幌に移植されたのである。

### 「イエスを信ずる者の契約」に見るピューリタンの信仰

ピューリタン信仰は、おおまかにまとめるならば契約主義、聖書主義、そして福音主義に集約されると言



クラークから大島正健に贈られた聖書（同）

われる。実は、これらの3つの要素は「契約」のなかにあますところなく表わされているので、「契約」の文言に即しながら解説を附していく。なお【】は、「契約」から抜粋した文言であることを示す。(訳は、2022年6月札幌独立キリスト教会執事会改訂訳による)

### (1) 契約主義

【神に対し、また相互に対して、厳肅に誓約する。】

創世記17章には、神がアブラハムへこのように語る場面がある。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。」ピューリタンは、このいわゆる「アブラハム契約」と呼ばれる箇所に倣い、自分の意思と責任に基づいてものごとに積極的に参与することを契約によって表明する文化をもつ。クラークが、「イエスを信ずる者の契約」という形式をもって学生たちに署名を求めたのもこのことのゆえである。

### (2) 聖書主義

【我らは信ずる、聖書が、人に対する神からの、言葉による唯一の直接的啓示であり、来たるべき栄光の生に向けての唯一の完全で誤りのない手引きであることを。】

聖書は神のことばであり、これを人間が従うべき唯一絶対の権威として認め、聖書以外のどのような権威にも頼らない

という態度は、宗教改革が打ち立てた基本的確信である。この信条を「聖書のみ(ソラ・スクリプトゥラ)」と呼ぶ。

### (3) 福音主義

【我らは信ずる、我らの慈悲深き創造主、我らの義なる至上の支配者でまた我らの最後の審判者である、唯一なる永遠の神を。】

唯一の神である方は、この世界と人とを創造され永遠に支配しておられる。

【我らは信ずる、心から悔い、そして神の子イエスへの信仰によって罪の赦しを得るすべての者は、生涯にわたり聖霊によって恵み豊かに導かれ、天の父の絶えざる御心によって守られ、ついにはあがなわれた聖徒の歓喜と希望とが備えられることを。】

人は神によって造られたものであるのに、アダム以来、神に逆らい罪を犯して永遠の呪いを受けるべきものとなつた。しかし神はひとり子イエス・キリストを遣わし、十字架において身代わりとなって罪のさばきを受けられ、三日目に死からよみがえられた。罪を悔い、救い主イエスの十字架を信じる者は、だれでも罪を赦され、やがて来るさばきの日には、永遠のいのちをもって神の国に迎えられる約束をいただく。この罪の赦しはただ信じる信仰によってのみいただくのであり、人の業や功績は一切関係ない。ルターはこの信条を「信仰のみ(ソラ・フィデ)」と呼んだ。以上が福音主義と呼ばれる内容

である。

## 佐藤、新渡戸はどのようにしてキリスト者となったのか

佐藤は1856年、新渡戸は1862年、どちらも南部藩士の子弟として生を受け、「忠義と名誉の象徴である大小二振の刀を腰にさす」（「武士道」）身分であることを約束されていた。しかし、時代は大きく動き始める。そのころ南部藩の百姓は度重なる天候不順により困窮を極め——これは私も祖母から聞いたことがあるのだが——食い扶持を減らすためにしばしば「子返し」が行われるほどであった。そこへ慶応2年（1866年）、大凶作が襲い、農村が対応に腐心していたとき、藩は無理な水田工事を強行しようとしたため、百姓たちは一揆を起こす。このとき、私の故郷である平沢村（現在の北上市平沢）の百姓たちは、北上川周辺の村々の者たちと合流し、佐藤の生家の近くにあった酢屋を襲い、盛岡に訴え出た。その数は三千余人にのぼったという。藩は百姓たちを慰留し、ついには願い通り免許して一揆の頭人を追求しなかった（森嘉兵衛『南部藩百姓一揆の研究』）。このころ、すでに藩の威信は失われつつあったのである。そして1868年明治となり、戊辰戦争で南部藩は賊軍とみなされ藩体制は崩壊していく。佐藤と新渡戸は、いのちをかけて藩に異議申し立てをする農民の叫び声を聞き、磐城白石に転封されていく藩士の嘆きを目の

当たりにし、今まで拠り所としていたものがいかにはかないものであるかを痛感したに違いない。幸い、ふたりは東京英語学校から札幌農学校に進み、学問を修めて日本の近代化のために働くという道筋は見えてきた。しかし、よって立つべき土台がいまだ判然としない。そのことに大きな不安を抱えたはずである。それは、地方の士族出身の青年が直面した例外的な悩みではなかった。伊藤博文も、国家として向き合わなければならぬ大きな課題であると見抜き、明治憲法制定審議会の席上のように述べている。「(欧洲にはキリスト教という土台があるが)然ルニ我が国ニ在テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ、一モ国家ノ機軸タルヘキモノナシ。(仏教も神道も)宗教トシテ人心ヲ帰向セシムルノ力乏シ。」（『枢密院会議簿記・一、憲法草案・明治二十一年六月』）そこで伊藤は、「我国ニ在テ機軸トスヘキハ、独リ皇室アルノミ」（同）と結論づけ、新しい国家を構想した。しかし、このような上からのお仕着せではなく、自らの手で機軸を選び取った者たちがいた。彼らこそ、「契約」にその名を記した者たちであり、その力強い著名からは眞の道を見いだした喜びがあふれてくるように思えるのである。

しかし公平を期すために、全員がみな同じ熱をもって署名したのではないことも触れておかなければならない。一期生の山田義容は、後に自分は「契約」にふさわしくないと思い悩み、帰国したクラ

一クに棄教のいきさつを述べ謝罪の手紙を書いた。このエピソードは、「契約」に署名するかどうかという選択にあたり、どれほど真剣さを要求されたのかを示している。

### 私はいかにしてキリスト者となったか

農家の長男であった父は、国鉄 (JRの前身) に就職したが、徵兵されてからだを壊し、志半ばで国鉄を辞めなければならぬという挫折を味わった。父は、果たせなかつた夢を兄と私に託そうとし、兄はその要求に応えたのだが、私には重圧にしか感じられず、逃れるように北海道に渡った。巖鷲寮の玄関をくぐったとき、階段の踊り場に散らかる酒瓶に驚きながらも、解放されたという安堵も感じた。ところが、それから数ヶ月して私は大学に行けなくなってしまうのである。父への反抗心だけを糧に大学に進んだのだから、そこから解放されてしまえば前に進めなくなるのも当然であろう。そのときから「人間は何のために生きるのか」、この答えを求めて随分苦しむことになる。8年かけてなんとか卒業しても、問題が解決されたわけではない。就職し家庭を持っても心のどこかにすき間風が吹いていて足元が定まらない。そんなことがいつまでも続くはずではなく、ある日、家庭崩壊の危機がやってきた。自分の罪によって家族を苦しませた痛烈な自覚から途方に暮れてしまったとき、私の口から「教会に行く」と

いうことばが出た。今思い返してもなぜそんなことを口走ったのか、自分でもわからない。とにかく次の日曜日に教会に行くと、牧師は聖書を開き、イエス・キリストの十字架に罪の赦しと救いがあることを教えてくれた。私はずっと探し続けてきた答えこそこれであると悟り、感激して「信じます」と告白した。こうして私はその年のクリスマスに洗礼を受けたのである。

二人の大先輩に及ぶべくもないが、このように信仰に至る背景をたどっていけば、真の生きる機軸を探し求めていたという点では共通するものがあるように思う。

### 隣人を愛する

「契約」にはこういうことばがある。  
【自分のようにあなたの隣人を愛しなさい。】

これは、イエスが大切な戒めとして教えたことばであるが、実践するとなるときわめて難しいことでも有名である。牧師である友人と互いの苦労話をしていたとき、たまたまこの話題になり、こんな結論に至った。「隣人を愛するとは、どんなに理不尽なことでも身に降りかかったものを引き受けていくことではないか。」

罪のない神の一人子キリストが十字架において身代わりとなって罪のさばきを受けられたこと、これが福音の核心であるわけであるが、考えてみるとこれほど

理不尽な話はない。キリストが、このように自ら進んで十字架の道を歩まれたのであるならば、私たちもキリストに倣って理不尽なことでも引き受けていく。困難な道ではあるけれど、目指すところはそこにあるのではないだろうか。

佐藤と新渡戸は、何の見返りも求めずに隣人を愛するということをそれぞれの置かれた場において実践しようとした、そのような生涯を送ったのだと私は思うのである。

## 謝辞

札幌独立キリスト教会の関係者には、「契約」の閲覧、「契約」と「大島の聖書」の写真データ、および日本語訳の使用を快く許可していただいた。ご配慮に感謝する。

大宮司信氏（北海道大学医学部名誉教授）に

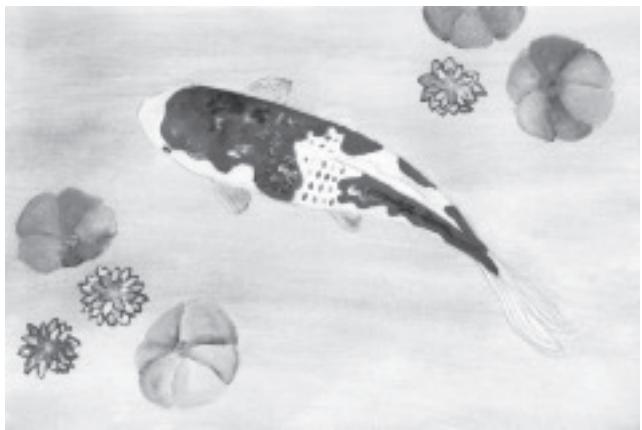
は、札幌独立キリスト教会へ紹介の労を執っていただいた。おかげで貴重な経験をすることができ、ここに感謝の意を表したい。 ↪



おざわ かずお

1985年 北海道大学理学部物理学科卒業、  
巖鷺寮卒寮。  
2000年 聖書神学舎入学、2003年同卒業  
札幌中央福音キリスト教会牧師、北海道聖  
書学院講師（新約聖書、ギリシャ語）





巖鷲寮(佐藤・新渡戸記念寮)」の創立記念式典で

## 北大の横田篤理事・副学長がご講演

11月23日(土・祝)に、巖鷲寮(佐藤・新渡戸記念寮)の創立記念式典(寮祭)が開催され、横田篤理事・副学長が「北海道大学のSDGsの歴史と現在地」と題して講演を行いました。

巖鷲寮は、昭和2年に創立された学生寮です。北海道帝国大学に新設された医学部の第1期生になるべく予科に入学した4人の学生が、当時の佐藤昌介総長に熱心に働きかけ、今のクラーク会館付近のキャンパス内に建設されました。現在も北海道大学生活協同組合本部前には本寮設立の地として、記念プレートが掲示されています。平成11年に開寮した現在の4代目「巖鷲寮」は、札幌農学校校長、東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学初代総長を歴任された佐藤昌介先生と、佐藤先生の盟友であり、本寮を訪問したこともある新渡戸稻造博士から名前をとつて「佐藤・新渡戸記念寮」と称されています。創立当初、本寮は、旧南部藩にゆかりのある男子学生(岩手、青森県出身者)のために設立・運営されてきましたが、現在では、全国から男子学生のみならず女子学生も入寮しています。

本式典で、横田理事・副学長は、佐藤先生のご尽力により、北海道大学は世界最大の研究林(国土の0.2%)、広大な農場を保有するに至ったこと、こうしたフィールド資産を活用して、SDGs課題解決の中核をなすフィールドサイエンスに強みを持つ大学として発展してきたこと、THEインパクトランクイングで5年連続国内1位の評価を得てい



巖鷲寮創立97周年式典で  
記念講演をされる北海道大学の横田篤副学長

ること、令和 5 年には「HUVISION2030」を、同 6 年には「北海道大学サスティナビリティ宣言」を策定したことなどを説明するとともに、様々な専門分野において、本学で学ぶこと自体の価値や素晴らしさを学生の頃から理解してもらいたいことを伝えました。また、令和 8 年に創基 150

周年を迎えるにあたり、「光は、北から」を合言葉に、世界の課題解決に貢献する大学を目指していることも説明しました。

本式典ではこのほかに、寮生と横田理事・副学長との懇談、寮所蔵品の説明、寮内見学ツアーの時間が設けられ、その後、現役の寮生、佐藤・新渡戸記念寮役員との懇親食事会の時間も設けられました。

(サスティナビリティ推進機構)

おことわり：本記事の本文部分は北海道大学発行の『北大時報』2025年1月号の19ページに掲載された記事を転載したものです。

## 東京一心会だより

令和 6 年の東京一心会は、例年通り 10 月 5 日に開催しました。昨年もそうですが長年使っていた東京巣鴨の会場がコロナの影響で閉鎖されましたのでどこか固定した会場をと考えていました。昨年は（東京）有楽町駅近くの銀座「みちのく」にて開催しましたが、どこか固定した会場をと考えていました。結果、昨年から世話人を引き受けてくれた佐々木泰弘さんが選定してくれたサッポロビール「銀座七丁目ライオン」に決定。この会場は以前使った事があったと思いますが、札幌で青春の一時期を過ごした面々にとっては落ち着く会場かもしれません。今後はここを固定会場としても良いかもしれません。



事務室で本法人役員と歓談される横田副学長

# 一般財団法人巖鷲寮定款

(2017年6月9日一部変更)

## 第1章 総則

### (名称)

第1条 この法人は、一般財団法人巖鷲寮と称する。

### (事務所)

第2条 この法人は、主たる事務所を北海道札幌市に置く。

## 第2章 目的及び事業

### (目的)

第3条 この法人は、主として岩手及び青森両県全域並びに秋田県の一部旧南部藩領の出身者、又はそのゆかりの子弟にして、札幌市近郊の大学に在学する学生の勉学に資し、秩序ある共同生活を通じて、健康の増進と、品性の陶冶を図ることを目的とする。

### (事業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 学生寮「佐藤・新渡戸記念寮（旧称：巖鷲寮）」の維持経営
- (2) 審生の心身鍛錬、教養向上のための行事及び会合
- (3) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

2 前項第1号から第3号までの事業は、札幌市において行うものとする。

## 第3章 資産及び会計

### (基本財産)

第5条 この法人の目的である事業を行うために不可欠な別表の財産は、この法人の基本財産とする。

2 基本財産は、この法人の目的を達成するために善良な管理者の注意をもって管理しなければならず、基本財産の一部を処分しようとするとき及び基本財産から除外しようとするときは、あらかじめ理事会及び評議員会の承認を要する。

### (事業年度)

第6条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終まる。

### (事業計画及び取支予算)

第7条 この法人の事業計画書、収支予算書については、毎事業年度開始日の前日までに、理事長が作成し、理事会の決議を経て、評議員会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も、同様とする。

2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置きするものとする。

### (事業報告及び決算)

第8条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、理事長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時評議員会に提出し、第1号及び第2号の書類についてはその内容を報告し、第3号から第5号までの書類につ

いては承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属明細書
- (3) 貸借対照表
- (4) 損益計算書（正味財産増減計算書）
- (5) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）の附属明細書

2 前項の書類のほか、次の書類を主たる事務所に5年間備え置きとともに、定款を主たる事務所に備え置きするものとする。

- (1) 監査報告
- (2) (剩余金の分配の制限)

第9条 この法人は、剩余金の分配を行うことができない。

#### 第4章 評議員

(評議員)

第10条 この法人に評議員6名以上15名以内を置く。

(評議員の選任及び解任)

第11条 評議員の選任及び解任は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「法人法」という。）第179条から第195条の規定に従い、評議員会において行う。  
(任期)

第12条 評議員の任期は、選任後4年内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。

2 任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。

3 評議員は、第10条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお評議員としての権利義務を有する。

(評議員に対する報酬等)

第13条 評議員は、無報酬とする。ただし、評議員には、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。

#### 第5章 評議員会

(構成)

第14条 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

(権限)

第15条 評議員会は、次の事項について決議する。

- (1) 理事及び監事の選任及び解任
- (2) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）並びにこれらの附属明細書の承認
- (3) 定款の変更
- (4) 残余財産の処分
- (5) 基本財産の処分又は除外の承認
- (6) その他評議員会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

(開催)

第16条 評議員会は、定時評議員会として毎年度決算終了後、3ヶ月以内に開催するほか、必要がある場合に開催する。

(招集)

第17条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき理事長が招集する。

2 評議員は、理事長に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

(決議)

第18条 評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数をもって行わなければならない。

(1) 監事の解任

(2) 定款の変更

(3) 基本財産の処分又は除外の承認

(4) その他法令で定められた事項

3 理事又は監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。理事又は監事の候補者の合計数が第22条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(決議の省略)

第19条 理事が、評議員会の目的である事項について提案した場合において、その提案について、議決に加わることのできる評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の評議員会の決議があつたものとみなす。

(報告の省略)

第20条 理事が評議員の全員に対し、評議員会に報告すべき事項を通知した場合において、その事項を評議員会に報告することを要しないことについて、評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その事項の評議員会への報告があつたものとみなす。

(議事録)

第21条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

2 出席した評議員のうちから、当該評議員会において選任された議事録署名人2名以上が、前項の議事録に記名押印する。

## 第6章 役員

(役員の設置)

第22条 この法人に、次の役員を置く。

(1) 理事 6名以上9名以内

(2) 監事 2名以上3名以内

2 理事のうち1名を理事長、2名以内を常務理事とする。

3 前項の理事長をもって法人法上の代表理事とし、常務理事をもって同法第91条第1項第2号の業務執行理事とする。

(役員の選任)

第23条 理事及び監事は、評議員会の決議によって選任する。

2 理事長及び常務理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

(理事の職務及び権限)

第24条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。

2 理事長は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、その業務を執行し、常務理事は、理事会において別に定めるところにより、この法人の業務を分担執行する。

3 理事長及び常務理事は、毎事業年度に4箇月を超える間隔で2回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務及び権限)

第25条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、この法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(役員の任期)

第26条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。

2 監事の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。

3 補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。

4 理事又は監事は、第22条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての権利義務を有する。

(役員の解任)

第27条 理事又は監事が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

(1) 職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき。

(2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき。

(報酬等)

第28条 理事及び監事は、無報酬とする。

(顧問)

第29条 この法人に、任意の機関として、若干名の顧問を置くことができる。

2 顧問は、次の職務を行う。

(1) 理事長の相談に応じること

(2) 理事会から諮問された事項について参考意見を述べること

3 顧問の選任及び解任は、理事会において決議する。

4 顧問の報酬は、無償とする。

## 第7章 理事会

(構成)

第30条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

第31条 理事会は、次の職務を行う。

- (1) この法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 理事長及び常務理事の選定及び解職

(招集)

第32条 理事会は、理事長が招集する。

2 理事長が欠けたとき又は理事長に事故があるときは、各理事が理事会を招集する。

(決議)

第33条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

(決議の省略)

第34条 理事が、理事会の決議の目的である事項について提案した場合において、その提案について、議決に加わることのできる理事の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の理事会の決議があったものとみなす。ただし、監事が異議を述べたときは、この限りでない。

(報告の省略)

第35条 理事又は監事が理事及び監事の全員に対し、理事会に報告すべき事項を通知した場合においては、その事項を理事会に報告することを要しない。ただし、法人法第197条において準用する同法第91条第2項の規定による報告については、この限りでない。

(議事録)

第36条 理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

2 当該理事会に出席した理事長及び監事は、前項の議事録に記名押印する。

第8章 定款の変更及び解散

(定款の変更)

第37条 この定款は、評議員の決議によって変更することができる。

2 前項の規定は、この定款の第3条及び第4条及び第11条についても適用する。

(解散)

第38条 この法人は、基本財産の滅失によるこの法人の目的である事業の成功の不能その他法令で定められた事由によって解散する。

(残余財産の帰属)

第39条 この法人が清算をする場合において有する残余財産は、評議員会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

## 第9章 公告の方法

(公告の方法)

第40条 この法人の公告は、官報に掲載する方法により行う。

#### 附 則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める一般法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める特例民法法人の解散の登記と、一般法人の設立の登記を行ったときは、第6条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。

別表 基本財産（第5条関係）

財産種別	場所・物量等
土地	462.80平方メートル 札幌市中央区北7条西18丁目4-23 69.41平方メートル 札幌市中央区北7条西18丁目28-191
建物	579.01平方メートル 札幌市中央区北7条西18丁目4-23 地下1階付2階建

以上 当法人の定款である 理事長 昆泰寛

## 一般財団法人巖鷲寮規則

(2023年5月18日一部変更)

### 〈前文〉

- 1 当寮は、大正末期・北大に学ぶ岩手県出身者の学生の要望に応じ、当時の北大総長佐藤昌介氏の主唱と、これに呼応した北大教官の奔走、岩手県及び旧南部領の先輩の物心両面からの善意とにより創立された学生寮である。
- 1 当寮は、札幌市に遊学する岩手県、青森県域、旧南部藩並びにこれら地域にゆかりのある大学生を収容するとともに、責任ある社会人への修練の場として存在するものである。
- 1 寮生は、建寮の精神を自覚し、寮生活を通じて互いに切磋琢磨し、優れた社会性を習得し、あわせて寮の発展に尽力しなければならない。

### 〈目的〉

第1条 この規則は、財団法人巖鷲寮の管理運営について、必要な事項を定めることを目的とする。

### 〈名称〉

第2条 当寮は「佐藤・新渡戸記念寮」と称する。

### 〈管理運営並びに責任者〉

第3条 巖鷲寮の管理運営は財団法人巖鷲寮理事会によって行われ、理事長をその責任者とする。

2 寮生の生活を支援し、設立の趣旨にふさわしい規律を維持するために、理事会の下に役員及び職員からなる「生活部」を設けることができる。

### 〈寮生の構成〉

第4条 当寮は、岩手県、青森県全域及び両県にゆかりのある大学生により構成される。

ただし、欠員を生じたときはこの限りではない。

### 〈施設、設備保全の義務〉

第5条 管理運営責任者は寮の施設、財産の保全及び改善につとめるものとする。

2 寮生は寮の施設、財産の保全及び防火管理並びに寮内環境の整備向上及び保健衛生管理に努めなければならない。不當に寮の施設、財産を損傷又は滅失したときはこれを賠償しなければならない。

### 〈寮の行事〉

第6条 財団はその設立の主旨に基づいて、寮生の協力のもとに創立記念祝典、談話会などの行事を行うものとする。

### 〈寮生活の自主運営〉

第7条 寮生活の自主運営に関しては、寮長をもってその責任者とし、寮長は管理運営責任者の承認をえて、寮生活の自主運営を行うものとする。

3 寮生活の健全で円滑な運営のため、必要に応じて寮生大会及び寮協議会を開催する。  
〈会計〉

第8条 寄生は、別に定める寮費（部屋代及び寮生活費）を納入しなければならない。財團及び寮における生活は、この寮費によって運営される。

〈入寮手続〉

第9条 当寮に入寮を希望する者は、所定の書類を添えて、管理運営責任者に提出しなければならない。

- 2 入寮選考は、希望者の人物・経済状態等を考慮の上、特別（選考）委員によって行われる。管理運営責任者は、その報告をうけ入寮の許可を行う。
- 4 入寮の許可を受けた者は、直ちに誓約書を提出し、入寮費、敷金、及び一か月分の寮費を納入しなければならない。
- 5 入寮の許可を受けた者が前項の手続きを怠ったときは、入寮の許可を取り消すものとする。
- 6 在寮期限は、原則として入寮時における進学系列の最短修業年限とする。

〈退寮〉

第10条 退寮を希望する者は、管理運営責任者の定める手続きに従わなければならない。

寮生が次の事項に該当したときには、退寮させることができる。

- ①寮の風紀、秩序をみだすとき。
- ②寮の名誉を著しく損なうとき。
- ③寮費を3か月以上滞納したとき。

〈自主運営に必要な事項〉

第11条 寄生活の自主運営に必要な事項は管理運営責任者の承認をえて別にこれを定める。

付則

- 1 この寮規則は、（財団法人巖鷲寮規則として）昭和62年（1987年）4月1日から施行する。
- 1 この寮規則の一部変更は、理事会で決定した日（2002年11月23日）から施行する。
- 1 この規則の名称を「一般財団法人巖鷲寮規則」と改め、2013年4月1日から施行する。
- 1 この寮規則の第3条第2項に定義されている「生活部」は一般財団法人への移行（2013年4月1日）とともに試行的に設置・運用されてきたが、改めて理事会が決定した日（2023年4月8日）からこの項目を運用する。

## 2024 年度寮日誌

- 4月 3名の新入寮生を迎える
- 4月 8日 新入寮生歓迎会 参加者 29名 (招待 13名、寮生 16名)
- 5月 食堂にエアコン設置 418,165円
- 5月 寮の裏にて寮生による家庭菜園開始
- 5月 ボイラーポンプ修繕 253,000円
- 7月 家庭菜園にて野菜収穫始まる
- 7月 冷蔵ショーケース設置 617,900円
- 8月 ガスレンジ交換 491,428円
- 8月 台所のロールスクリーン交換 18,500円
- 8月 寮生の部屋 2室網戸修繕 58,905円
- 10月 給湯二次ポンプ修繕 74,800円
- 11月 23日 記念式典・寮祭 参加者 31名 (招待 14名、寮生 17名)  
(特記) 式典において北海道大学の横田篤副学長から「北海道大学の SDGs の歴史と現在地」という題でお話をいただいた
- 12月 ボイラーパーツ交換 85,800円
- 2月 15日 卒寮式 参加者 27人 (ゲスト 11人、寮生 16名人)



## 2024年度巖鷲寮役員名簿

役 職	氏 名	勤 務 先
顧問	高木 信夫	北大名誉教授
顧問	小笠原正明	北大名誉教授
顧問	佐藤 馨一	北大名誉教授
顧問	渡辺 崇彥	日本データサービス・FC 日本データサービスホールディングス社長
顧問	千葉 博正	札幌大学名誉教授
理事長	昆 泰寛	北大名誉教授
常務理事	中島 和彦	元北海道庁職員 北海道銀行
理事	横澤 宏一	北大大学院保健科学研究院教授
理事	長山由起夫	北海道庁職員
理事	佐藤 剛	小樽商科大学助教
理事	塚本 博隆	北海道新聞社社員
監事	本多 丘人	元北大大学院歯学研究科准教授
監事	千葉 和幸	元札幌駅総合開発（株）
監事	中尾 明子	中尾天法律事務所
評議員	櫛引 正	八戸高校同窓会札幌支部顧問
評議員	齋藤 彰	巖鷲協会（札幌岩手県人会）副幹事長 ソニー生命保険（株）社員
評議員	小澤 和男	札幌中央福音キリスト教会牧師
評議員	岡崎 克則	元北海道医療大学教授
評議員	柴田 剛	ラモ・テクノロジー（株）
評議員	窪田 春海	（株）ドーコン社員

## 編集後記

◆ 今年度、寮誌係を努めさせていただきました、2年目の若宮彬と申します。巖鷲寮誌編集に携われたことを光栄に思います。

初めは謝礼に期待して引き受けたのですが、この作業を通じて二つ得たものがありました。一つ目は経験です。仕事を引き受け、期日から逆算し、人に呼びかけ、実行する。こう書くと30文字にもみたない作業も現実に行うと、相応の時間と労力が必要となることを身をもって学ばせていただきました。二つ目は、寮誌係の眞の魅力です。それは寮生全員の原稿を1番に読めることです。17人、素数とか、とあるセミの発生周期ぐらいしか印象のない数字です。しかし、実際には年齢も出身地も歩んできた人生もバラバラな「人間」が17人いるということです。多種多様な背景を持つ寮生が綴る文章もまた多種多様です。その原稿を誰よりも早くいの一番に読むことができる。これを役得と言わずしてなんというのでしょうか。

この寮に入寮してから早くも2年弱。さまざまな行事を経験し、多くの方々と関わることで、巖鷲寮で生活することの価値を少しづつ理解してきました。それは社会へと歩み出す前の慣らしであるということです。限りなくプライベート

に近い環境ですが、当然ながら寮は一つの社会でしょう。人との関わり方をむき身の状態で経験できる最後の機会であり、貴重な場なのではないでしょうか。今年度で10名近くの方が退寮され来年度から寮の環境は大きく変わります。全く別物となるであろう社会で再び自分自身を見つめ直していくと思います。

(若宮彬)

◆ 何を書けばよいか定まらないまま締切日を迎える。もちろん自分のせいだが、彼のせいでもある。関税、送還、支払い停止……日々ニュースをばらまいている彼である。米メディアはその戦略を“flooding the zone”と呼ぶ。情報を洪水のように流し、反対勢力を思考停止に陥らせる狙いだという。我々にはのような注意喚起の情報も新たな氾濫であり、何かを主体的に考えるキャパシティーは奪われていく一方だ。

そんな疲れを抱いているあなたには、寮誌の目次を飾るシマエナガに目を向けてもらいたい。東京に住む私の周りでは小さなシマエナガのブームが起きている。カバンやTシャツを妖精鳥で飾る持ち主とは自然に会話が弾む。「ひょつとして北海道の人？」違っていたって構わない。シマエナガを好きな人はよい人に決まっている。お会いしたことはない

が、イラストを描いた中原ひさみさんに最大の敬意と感謝を捧げたい。ずっと見ていたい挿絵です。

そして北海道の雄大な自然との格闘を記録した米田啓祐さん。私は編集を担当したものの、ただその冒険記に夢中になっただけで、何も加えることも引くこともなかった。どうか皆さんにも、米田さんと仲間たちの青春山行記を味わってほしい。

最後にいよいよ 100 年記念誌に向けた準備が始まる。私はまだ中川キャップの素晴らしい企画案に見とれているだけ。洪水だなんだと言い訳せず役割を果たしたい。

(高橋 元氣)

❖ 長らく新聞紙面の編集を担当していましたが、24 年 4 月からはネット配信の担当に移りました。「仕事内容はそれほど変わらないだろう」とたかをくくつっていましたが、想像以上に仕事内容が異なることに驚いています。紙面編集は「いかに簡潔に、理解しやすいように紙面をまとめるか」が目的ですが、ネット配信は「いかに検索にひつかかるか、クリックしてもらえるか」ということもポイントになってきます。

一方でネット配信ならではの長所も感じています。記事の閲覧数がリアルタイムで表示されるため、読者の反応がダイレクトに分かることです。意外な記事

が思っている以上に読まれていることもあります。旧来のアナログ思考で凝り固まった頭を日々、アップデートをかけながら仕事をする毎日です。

(塙本 博隆)

❖ 最近「数独」にはまっています。「9×9 のマスに 1 から 9 迄の数字を配置」「各行各列そして 3×3 のブロックに同じ数字を重複してはダメ」という簡単なルールに従うだけです。かなり単純なルールのようですが問題がグレードアップするに従って意外に手こずります。サラリーマン時代通勤時にこれをやっている人をよく見かけたものです。

やり始めた動機は「ボケ防止」。仕事のリタイア後は「毎日が日曜日」状態。時間が有り余る程。これではいけないと、色々な事をルーティン化していきました。つくづく若い時から何か自分の趣味と言えるものを身に着けておくべきだったとの思いがつきません。

私が巖鷦寮に入った時代は、「入寮する=麻雀必須」とのイメージがありましたが、意外にも麻雀メンバーは固定されており、むしろ講義に出席した後に雀荘に行く方が多かった気がします。あるとき長時間卓を囲んでいるときに体調が悪くなりましたが、抜けるに抜けられず、その後大変な事態になってしまった事がありました。それがトラウマになり、以降一切やっていません。今考えるとも

つたいないことをしたとの思いがあります。2人～4人の相部屋だったこともあり、将棋、囲碁をやる人もいましたがなんと言っても寮生同士の「ノミニューション」が多かった様に思います。加えて寮母さんの長期休みの時など寮生が交代で食事を作ったりしたこともありました。このような生活環境の中で、思っていなかったものに興味を持ったり、その後自分の趣味になったりしたものがあると思います。アルバイトで寿司屋の配達をしていた寮生が家庭を持ってから家族に自分で寿司を握って提供している話を聞いたことがあります。

社会人になってからは高校時代同じ運動部に入っていた者と有楽町(東京都)で飲み会を繰り返し、休みの前日は徹夜で飲み明かすこともあります。2人ともこの駅の近くに職場があった事が頻繁に会った理由です。このような自堕落な(?)生活を続けてはマズイだろうということになり、当時流行っていた「異業種交流会」のようなことをやろうとなりました。色々なものに対する好奇心が再度ふつふとわいてきたのかもしれません。夫々の友達をさそって月一回集まり仕事の話を提供したり、知り合いに講師を頼んで「勉強会」(?)をやろうとなりました。一時出席者が2、3人になったりして会自体閉鎖の危機を迎えた事もありましたがどうにか乗り越えて

現在に至っています。最近では寮の先輩に講師を依頼したこともあり、現在迄40年近く続いています。

Youth is not a time of life, it is a state of mind. (サムエル・ウルマン)

「青春とは人生の一時期のことではなく、心のあり方のことだ」あまりにも有名な一言ですが、年をとってもまさに「心のあり方」が永遠の青春。せつかくの寮生活、お互いに刺激しあう対象がすぐそばにいます。すぐに目に見えるものではありませんが、素敵な「宝」を見失わない様に大きくアンテナを張っておくことを寮生にはお勧めします。特に毎号の寮誌特別寄稿は「青春の宝石箱」そのものです。

(鈴木 文明)

❖ 私は日本山岳会のアルパインスキークラブという山スキー同好会に所属している。会員の多くはリタイア組であるが、それぞれ多才濟々で、いつも新鮮な刺激を頂いている。

2月中旬、蔵王刈田岳の山スキーツアーに参加した。3日間寝食を共にしたが、ここで流行った言葉は“喜んで”であった。参加者の一人が、現役時代に商社へ勤務しており、上司に仕事を振られた際に「一応やっておきます」と答えたらこっぴどく怒られ、それ以降“喜んで”を連発することにしているという話からだった。

年齢を重ねるごとに身体機能が低下し、体の動きが鈍くなっているのは普通の現象である。それとともに精神的な面でも「億劫だなあ」「しょうがないなあ」と感じるようなことがあるが、それではいよいよ老人の域に差し掛かっていると言わざるを得ない。こういう時こそ、最初に“喜んで”と言って、積極的に物事に対応するのはいかがだろう。

“喜んで”何でも引き受けてキューキューとするのも困りものだが、探求心を忘れず、前に進む！ “喜んで”一生懸命やる！ というのもいいものだ。エジプト考古学者の吉村作治さんは 80 を超えた今でも、嬉々としてエジプトを掘り続けている。われらが郷土の先人の偉大な功績を“喜んで”発掘し、継承していくものだ。

(大久保 勉)

❖ 特別寄稿はそれぞれ 1 つの物語であるが、それが出版されるようになるまでも物語がある。

米田さんの記事は昨年、寮生と一緒に「寮生近況」欄を編集しているときに 1 枚の登頂写真に目を奪われたことから始まった。登頂の瞬間までスキーを担いでいる 3 人の姿がその理由の 1 つ。そのむかし、二代目の巖鷲寮 1 年のとき同室だった故川原田義彦君が山スキー部の人だったことを思い出した。川原田君は定期試験の直前でも迷わず無意根小屋

の小屋番に出かけて行くような人だった。山登りの世界の規律の厳しさは、私のような下界の人間の常識を越えていた。その無意根小屋も昨年暮れの火事で無くなってしまったが。

もう 1 つは、登頂した 3 人のクライマーの嬉しそうな顔とは対照的に、背景の山容に人を寄せ付けない厳しさを感じたからだ。「この山行には物語がある」と直感して執筆を依頼したのだが、その詳細は米田さんの文で生き生きと伝えられている。久しぶりに寮誌に掲載された現役の寮生の手記である。私じしん山好きではあったが、最後までビギナーの域を出なかつた。そういう人間が、名にし負う日高の冬の縦走に参加したような気持ちになるのだから、その筆力は非凡である。

猪狩さんの賢治論にもいきさつがある。賢治コレクションについて、著者は遠慮して書いておられないが、本寮が引き取るチャンスはあった。そのお申し出があったころ寮の蔵書は本箱や書棚に収容しきれず、事務室の本箱の天板にまであふれ出していた。本寮の「指定地域」を代表する作家・詩人なのだから当然備えておくべきコレクションではあったが、空間的にいかんともしようがなかつた。同じような話は他にもあった。

ところが、創立 100 周年の記念事業で「カミカゼ」が吹いた。二代目の寮で同

じ釜の飯を食べた仲の実業家の W さんが、「自由に使ってかまわないが、一部を図書の充実にあてて欲しい」と多額の寄付を申し出られたからである。かつて娯楽室という寮生がたむろする部屋があり、そこには創立以来の寮の蔵書が無造作に置かれていた。W 氏は本に特に関心があつたわけではなかつたが、日常的にそういう本に接していたことが社会に出て大いに役に立つたという。W 氏の条件はただ 1 つ「司馬遼太郎全集」を備えて欲しいということだった。

創立 100 周年記念事業実施委員会は担当委員を指定して、このご好意の実現のため作業を進めている。創立から 100 年を経て寮出身者・関係者が著した著書もかなりの数にのぼっている。デジタル資料の収集や視聴覚設備を充実させることは当然であるから、本寮には間もなく

く新しい「知の拠点」が誕生するだろう。

特別寄稿に目が行ってしまったが、本誌の目玉は、衆目の一一致するところ「寮生近況」である。ある年に原稿が集まらず休載になりかけたところ、寮祭の時に当時評議員だった本多丘人先生が、「『寮生近況』こそ寮誌の核だ」と主張され、その言葉に鼓舞された寮生たちが 2 週間ぐらいですべての記事を完成させたことがあった。

それから 10 年が経ち、「寮生近況」の魅力は年々増しているように見える。使われている写真も印象的だ。「ユーモリスト」と呼んでもよい面白い小文の書き手も現れており、それぞれの年代に応じて多様な文化が育っていることが窺われる。寮誌は時代を映す鏡だということを、編集にかかる度に感じる。

(小笠原 正明)

## 巖鷲寮誌 2024 年度

2025 年 3 月 31 日発行

編集委員

若宮 彬、高橋 元氣 (2003)、塚本 博隆 (1996)、鈴木 文明 (1972)

大久保 勉 (1969)、○小笠原 正明 (1968)

(括弧内は卒寮年、○印は編集長)

発行所：一般財団法人巖鷲寮

発行人：一般財団法人巖鷲寮・巖鷲寮一心会

〒060-0007 札幌市中央区北 7 条西 18 丁目 佐藤・新渡戸記念寮内

郵便振替 02740-1-19776 (加入者名：一心会 代表 小笠原 正明)

印刷所：(株)アイワード

© M. Ogasawara, 2025





## 一般財団法人巖驚寮

〒060-0007 札幌市中央区北7条西18丁目4-23

ホームページ : <http://www.ganjuryo.jp/>

メールアドレス : [info@ganjuryo.jp](mailto:info@ganjuryo.jp)